

草戸千軒町遺跡1971年度 発掘調査概報

1972年

広島県教育委員会

草戸千軒町遺跡1971年度発掘調査概報

目 次

I 調査の経過	(1)
a はじめに	(1)
b 協議の経過と1971年度調査の概要	(1)
c 調査区の設定	(3)
d 調査区における遺構・遺物出土の概況	(4)
II 遺 構	(9)
a B 1・C 1区の遺構	(9)
b C 2区の柱穴・土壙・溝状遺構	(11)
c C 2—g 区の埋葬土壙	(17)
d B 1区第1号井戸	(18)
e B 1区第2号井戸	(20)
f B 1区第3号井戸	(22)
g C 1区第7号井戸	(23)
h C 1区第8号井戸	(26)
i C 1区第9号井戸	(28)
j C 1区第10号井戸と土壤	(30)
k C 2区第1号井戸	(32)
l C 2区第2号および第3号井戸	(35)
m C 2区第4号井戸	(37)
III 出 土 遺 物	(40)
a 陶磁器・土器類	(40)
b 石製品・土製品	(46)
c 下駄・木製品類	(47)
d 鉄製品・銅製品・その他の遺物	(53)
e 古 銭	(55)
IV 総 括	(57)
付 発掘調査日誌抄	(63)

図版目次

- 図版1 a 遺跡遺景 b 調査区近景
図版2 a C2—8・h区柱穴遺構と人骨埋葬土壙 b C2—1・m区柱穴遺構
図版3 a C1—w区須恵器・土師器出土の状態 b C2—8区人骨埋葬土壙全景
図版4 a C2—b区第1土壤 b C2—m区第1・第2土壤
図版5 a C2—m区第3土壤 b 同上内部の状態
図版6 a B1区第1号井戸全景 b C1—f区ピット全景
図版7 a C1区第8号・第9号井戸全景 b C1区第8号井戸内部の状態
図版8 a C1区第9号井戸全景 b C2区第4号井戸全景
図版9 a C2区第1号井戸全景 b 同上井戸内部
図版10 a C2区第2号・第3号井戸全景 b C2区第3号井戸
図版11 a 中国系青磁器類 b 備前焼
図版12 a 常滑焼・瀬戸焼 b 須恵器・瓦質土器
図版13 a 土師質土器 b 石製品・土製品
図版14 a 木製品 b 下駄
図版15 a 漆器・かんざし・櫛 b 鉄製品・銅製品

図表目次

- 第1表 草戸千軒町遺跡出土下駄一覧表.....(50)
第2表 古錢一覧表.....(56)

插 図 目 次

第1図 調査区配置図	(4)
第2図 C 2—1区西壁断面図	(5)
第3図 B 1区・C 1区遺構実測図	(10)
第4図 C 2区遺構実測図	(12)
第5図 C 2—b区第1土壤実測図	(15)
第6図 C 2—h区第1土壤実測図	(15)
第7図 C 2—m区第2土壤実測図	(16)
第8図 C 2—m区第3土壤実測図	(16)
第9図 C 2—g区人骨埋葬土壤実測図	(18)
第10図 B 1区第1号井戸実測図	(19)
第11図 B 1区第2号井戸実測図	(21)
第12図 C 1区第7号井戸実測図	(24)
第13図 C 1区第8号井戸下部実測図	(26)
第14図 C 1区第8号井戸上部模式図	(27)
第15図 C 2区第1号井戸実測図	(33)
第16図 C 2区第2号井戸実測図	(35)
第17図 C 2区第4号井戸実測図	(38)
第18図 中国系陶磁器実測図	(40)
第19図 備前焼・常滑焼・瓦質土器実測図	(42)
第20図 土師質土器実測図	(43)
第21図 須恵器・土師器実測図	(45)
第22図 石製品・土製品実測図	(47)
第23図 下駄実測図	(49)
第24図 木製品実測図	(51)
第25図 漆器実測図	(52)
第26図 鉄製品・銅製品・骨製品実測図	(53)
第27図 古錢拓影	(55)

凡　　例

- I 本概報は、芦田川の低水敷中に孤立し流失のおそれのある遺跡包蔵中州
68,000m²のうち、北端の東側流水ぞい 1,400m² の緊急発掘調査の報告である。
- II 発掘調査は、國、県の経費をもって広島県教育委員会が実施した。
なお、福山市教育委員会ならびに建設省中國地方建設局福山工事事務所
の協力をうけた。
- III 本概報は、伊吹 尚、小都 隆、金井亀喜、河瀬正利、是光吉基、篠原芳
秀、中田 昭、山県 元、脇坂光彦が分担執筆し、河瀬・金井が編集した。
- IV 出土遺物の整理、実測は、上記のもののはか鹿見啓太郎があたった。

I 調査の経過

a はじめに

草戸千軒町遺跡は、昭和36年以来、本年度で第7次の調査をおこない、年次的な調査概報を上梓している。とりわけ、昭和43年以来、国庫補助金150万円、県費負担金150万円の計300万円で、流失の危惧される遺跡包蔵中洲の緊急発掘調査を毎年実施しており、この概報は昭和46年度調査の概要をまとめたものである。

概報を発刊するにあたり、物心両面での積極的協力を惜しまれなかつた福山市教育委員会、建設省中國地方建設局福山工事事務所および関係各位に対し、厚くお礼申しあげる。

b 協議の経過と1971年度調査の概要

この遺跡の取り扱いについては、すでに1970年度の調査概報で報告したように、遺跡が一級河川芦田川の低水敷中に包蔵されているため、河川管理者である建設省と文化財保護行政側との間で、幾多の曲折を経ながら保存のための話し合いを続けてきた。

建設省は、遺跡包蔵中洲の掘削工事を8~9年延期することは認めたが、見解は根本的にくいちがい、遺跡の保存は、きわめて困難となってきた。

さらに、昭和46年4月6日、特定多目的ダム法により芦田川の河口にダムを建設するという、「芦田川河口堰の建設に関する基本計画」が、建設省告示第657号として官報告示され、この遺跡の保存をさらに困難なものとしている。

県教育委員会は、その後も本遺跡の取り扱いについて、協議を重ねているが、建設省は、現在の緊急発掘調査を継続実施し、できるだけ早い期間に調査を完了するようという回答をえていない。

さて本年度は、6月11日に発掘届を文化庁に提出し、7月20日から調査に入

った。調査地は、遺跡の北限にあたる大中洲北端の東側流水敷ぞいで、建設省福山工事事務所の協力により、ブルドーザーとショベルカーで、約1.3mの表土砂層の排除をおこない、約3,000m²の発掘調査をおこなうこととした。途中、調査区の冠水などにより、調査が中断したこともあったが、井戸11基、溝、土壙、柱穴などの遺構を調査し、10月23日、発掘作業を終了した。

なお本年度の調査団は、つぎのとおりである。

調査団

松崎 寿和	広島県文化財専門委員 広島大学文学部教授
村上 正名	広島県文化財専門委員 広島大学教育学部付属福山高校教官
潮見 浩	広島県文化財専門委員 広島大学文学部助教授
西本 省三	広島県教育委員会社会教育課課長補佐
河瀬 正利	◎ ◎ 文化財保護主事
金井 亀喜	◎ ◎ 指導主事
伊吹 尚	◎ ◎ ◎
是光 吉基	◎ ◎ ◎
脇坂 光彦	◎ ◎ ◎
山県 元	◎ ◎ ◎
鹿見 啓太郎	◎ ◎ ◎
小都 隆	◎ ◎ ◎
中田 昭	◎ ◎ ◎
篠原 芳秀	◎ ◎ ◎

このほか、佐道弘之（福山市立光小学校教諭）、安芸郡小中学校社会科研究会々員、広大付属福山高等学校生徒などの方々の協力をうけた。ここに厚くお礼申しあげる。

（金井 亀喜）

c 調査区の設定

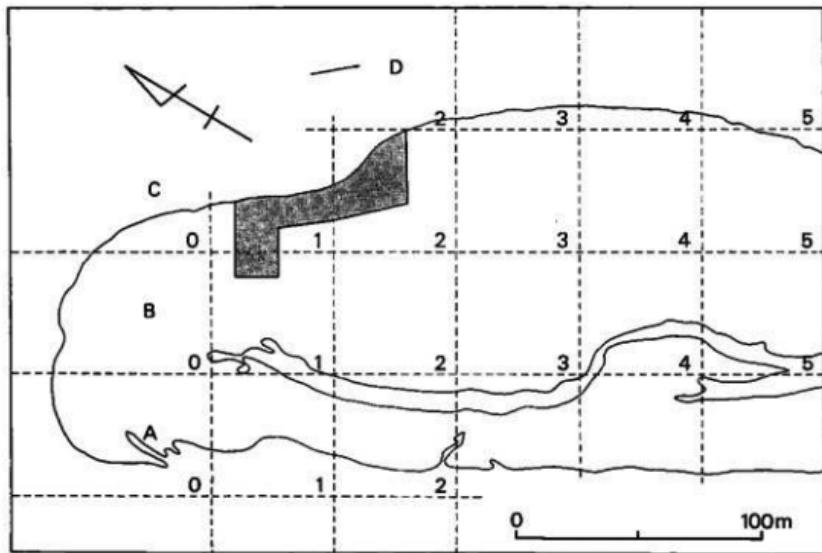
昨年度までの調査で、大中洲の周辺に散在する流水敷中の遺跡包蔵小中洲については遺構の実態をあきらかにしたので、本年度から大中洲を対象に調査を実施することとした。そこで、流水によって、もっとも遺構の消滅が危惧される、中洲北端部分の東側流水敷ぞいを中心調査をすすめることにした。

この地域はC0、C1、C2区にわたるが、調査当初の試掘によって、C0、B0、A0区は遺構上の堆積砂層が厚く、場所によっては2mをこえるところもあり、遺構の残存状態にもむらがあることがわかった。そこで、この最北端地域は防潮堤として残しておくこととし、今後の調査の進め方を考えるうえからも、A1、B1、C1区を南北に分断する幅15mの調査区を東西方向に設け、南北方向には、C1、C2区の流水敷ぞいを幅15m、長さ70mにわたって調査することにした。しかし実際に、河川の増水による作業の遅れなどから、A1、B1区にまではほとんど手がまわらず、結局この地域の調査は来年度にくり越した。したがって実際の発掘調査をおこなった地域は、C2区では、b・c・g・h・l・m・n、C1区ではf・g・k・l・q・u・w、B1区ではj・oの各グリッドの全部または一部である。

遺構の状態についてみると、土壙、柱穴、礎石などはC2区に集中しており、C1—v・w区あたりから北は過去の出水などにより遺構面が削られ、井戸や土壙などのように粘土層に深く掘り込んだもののみ遺存していた。

C2区の各グリッドでは、遺構検出のうえで調査区をさらに拡大した方が好都合であったところもあるが、流失の危惧される地域を調査最優先地区とすることと、調査区全体の作業の進捗状況から、当初予定した調査区をさらに拡大することは最少限度にとどめた。

井戸は調査した順に、C2区ではhグリッドのものを第1号井戸と称し、g・h・cグリッドのものを各々、第2号、3号、4号井戸と呼んだ。C1区では、昨年までに6基の調査を完了しているので、1グリッドのものを第7号井

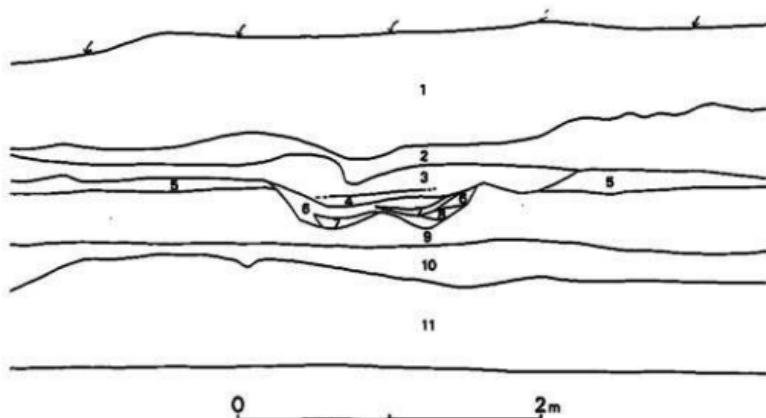


第1図 調査区配図

戸と称し、f グリッドの二基は、南側のものを第8号井戸、その北側のものを第9号井戸とした。またk グリッドのものは第10号井戸とした。B 1区ではj グリッドのものを第1号井戸とし、0 グリッドの2基は、北よりの曲物井戸を第2号井戸、その西南よりにあるものを第3号井戸とした。（金井 龜喜）

d 調査区における遺構・遺物出土の概況

本年度の発掘調査は、大中州の北端、東側流水敷ぞいに幅15m、南北70m、また、かぎの手に東西20m、幅15mの調査区を設定した。この地域は、1965年度調査区の北西で、1969年度調査区の西側にあたっており、今回の発掘調査面積は1400m²におよんだ。この付近は、左岸の河川敷改修工事に伴なって高水敷を整備したために、流水の勢いが強く、現在では、遺構相当面である暗かっ色粘土層の一部がえぐりとられている。



第2図 C2-1区 西壁断面図

- | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 表 土 | 2. 荒い灰色砂層 | 3. 砂混り暗かっ色層 | 4. 暗かっ色粘土層 |
| 5. かっ色砂質土層 | 6. 灰 色 砂 層 | 7. 暗かっ色粘土層 | 8. かっ色 土 層 |
| 9. 黄かっ色粘土層 | 10. かっ色粘土層 | 11. 暗青色粘土層 | |

調査区の土層についてはC1-8区からC2-1区におよぶ西壁の状況からみてみると、遺構相当面は、厚さ1m余りの表土層下に存在する暗かっ色粘土層で、その下層に青色粘土層がある。暗かっ色粘土層は比較的フラットな状態であるが、C1-9区から北側にかけては傾斜をなしており、遺構は少ない。また、C1-f区、C1-I区の一部、およびC2-1・m区においては、暗かっ色粘土層上に粗粒砂を多く含む暗かっ色粘土層が認められ、特にC2-1・m区では、上面には礫が多く、またすり鉢、土師質土器、土鍋などが集中的にみられており、遺構相当面として把握することができよう。1962年度の調査では、江戸・室町・鎌倉時代の遺構相当面が層序をなしていたといわれ、1968年度においては、室町・鎌倉時代の2層が推定されている。今回検出された層序についても同様に2層の遺構相当面を想定することができるが、粗粒砂を含む暗かっ色粘土層は部分的に遺存しているのみで、遺構を把握することは非常に困難な状況にあった。

B1区では、j区から第1号井戸、柱穴が、0区からは第2号井戸、第3号井

戸が検出された。第1号井戸は、木組み方形プランの井戸で、底部に曲物を置いており、曲物上面まで疊が一杯につまっている。第2号井戸は、曲物で井筒を構成しており、現在2個の曲物が積み重ねられているが、遺構相当面との関係からみてそれ以上の曲物が使用されていたものと推定される。下段は径36~40cmで、上段の曲物は径50~55cmをはかる。井戸の掘り方は漏斗状になっている。本井戸は他の井戸に比して湧水は豊富である。第3号井戸は、第1号井戸と同様の構造をもつもので遺物は少なく竜泉窯青磁片などがわずかに出土した。

C1区では、「区より第8号井戸、第9号井戸、曲物をすえたピット、8区からはピット群や落ち込みが、k区では第10号井戸、土壌が2か所、1区では第7号井戸が発見された。第7号井戸は、ほぼ円形の掘り方の中央部に構築された木組み方形プランの井戸で、井筒の底には河原石が敷きつめられており、この面より出土した備前焼より判断して室町期に比定されるものである。第8号井戸は、新たな構造を有するもので、井桁の一部が残存している。四隅に矩形の角柱を配し、その外側に各々よこ板4枚をあてて井筒を構成している。井桁は高さ50cmと推定され、桁側板はたて板を2段に重ねていたものと考えられた。内部には40~50cm前後の疊が詰めこまれ、人為的に廃絶されたことをものがたっている。構築時期は下底より出土した備前焼から室町期に比定される。第9号井戸は底部に曲物をすえた方形プランの井筒であるが、正方形の掘り方一杯に構築され、また、掘り込みも浅く湧水量は多くない。第10号井戸は、木組み方形プランの井戸で、内部からは土師質小皿、土鍋、竜泉窯青磁片、下駄、砧、櫛、漆器椀、紐、布片などが多量に出土した。曲物をすえたピットは、1969年度の調査において検出されたものと同様のものであり、内部からは大型の土錐が1点検出された。g区の北端でみられた落ち込みは2段に掘り込まれ、内部から敷石の一部があきらかにされ、遺物はそれに多く含まれていた。なお、w区からは平安時代に比定される須恵器杯、壺および土師器甕・壺がかたまってみいだされた。

C2区において検出された遺構は、b・g区にまたがって第2号井戸、第3

号井戸、c区から第4号井戸、g区より埋葬土壙が、h区では第1号井戸、1・m・n区およびc・g区においては溝状遺構および溝が、さらにこの区全域にわたってピットや土壙があきらかになった。第1号井戸は桶を2段に重ねて井筒を構成しているもので、下段の径65cm、上段の推定径は60cmをはかる。この上面には板が敷かれ、この上部に井桁が構築されていたものと推定される。第2号井戸は、一辺70cmをはかる木組み方形プランの井戸で、井筒は四方でたて板を三重にしており、下底部分には20~30cm大の礫が置かれている。本構造は今回の調査によってはじめてあきらかにされた。第3号井戸も、木組み方形プランの井戸で、底部に曲物をすえている。時期は室町期に比定される。なお、第2号、第3号井戸の掘り方は切りあい状態にあるが、土層および切り方の状態から第2号井戸が第3号井戸よりも新しい時期に構築されたものと考えられた。第4号井戸は、11角形の多面体を有する井筒で、外側にはさらに11枚のたて板を重ねている。底面には握拳大の河原石が敷きつめられ、また井筒中央には竹筒が埋めこまれており、人為的に廃絶されたことを示すものである。

埋葬土壙は、本年度の調査ではじめてあきらかにされたもので、壙は南北軸方向に145cm、幅77cmをはかり、人骨は北に頭をおき右下の側臥屈葬の状態で埋葬されていた。副葬品としては頭部に土師質小皿1、刀子1が置かれていた。この西側では以前に五輪塔が多く出土したといわれており、墓地としての可能性がある。

c・g区で検出された溝は非常に浅く、また、幅は30~50cmで狭く、途中で切れている。内部からは土師質土器片が若干出土しているが、その性格は詳かでない。

溝状遺構は2か所検出された。その1は東西方向にのびるもので、2段に掘りこまれており、東に行くに従がって深さを増している。内部からは土師質の塊が多量に出土した。その北に接してあきらかにされた溝状遺構は、深さの差から3つに分けることができよう。西から2番目の溝状遺構内にはピットや礫がみいだされ、また、東のそれは2段に掘り込まれており、南東隅から敷石の

一部が発見された。この溝状遺構の南西には、東西に走る杭列があり、1965年度の調査であきらかにされた、北から西に向う杭列に続くものと考えられた。

土壙は、非常に浅く掘りこまれたものと深めのものの2通りがある。浅く掘りこまれた土壙はb・c・h・m区にあり、b区のそれは長円形を呈し、底に土師質塊、土鍋、すり鉢、鉄製品、布片など多く出土した。c区の場合は円形で土師質土器が多数出土した。h区の土壙は、平面が隅丸方形状に掘り込まれ、内部からは土師質塊、鉄製品、瓦が発見された。m区のものは、円形状で土鍋片数点がみとめられた。掘りこみの深めのものは、m区から2か所あきらかにされた。その1は径1.3mの円形を呈すもので、内部の層序は5層に分かれ、遺物は第1層に土師質土器を多く含み、第4層には木片が多くみられるが、他の層からの出土は多くなく、土師質土器は小破片となっていた。この東側の土壙は、径1mの円形を呈すもので2段に掘り込まれ、上面には20~30cm大の疊がおかれていた。内部からはかんざしが1点出土した。

全域にわたって検出されたビットは、遺構面の遺存がよくないために関連づけることは非常に困難であるが、c区におけるビットの状況やまた、l・m区のビットから建物の存在を考慮する必要があるかもしれない。（是光 吉基）

I 遺構

a B1・C1区の遺構

本調査区は、C2区の北側にあり、鉤の手にのびて西に広がっている。この地域は過去の出水によって、すでに遺構相当面の大部分が失われ、まとまりのある遺構としてはとらえがたいが、井戸や土壙など暗かっ色粘土層に深く切り込んだものはよく残っており、井戸7基、土壙3か所、溝、落ち込み、わずかの柱穴などが発見された。

したがって、遺構面上の土砂の堆積は厚く、1.5~1.8mを測り、粗粒砂と細砂層が交互に堆積している。

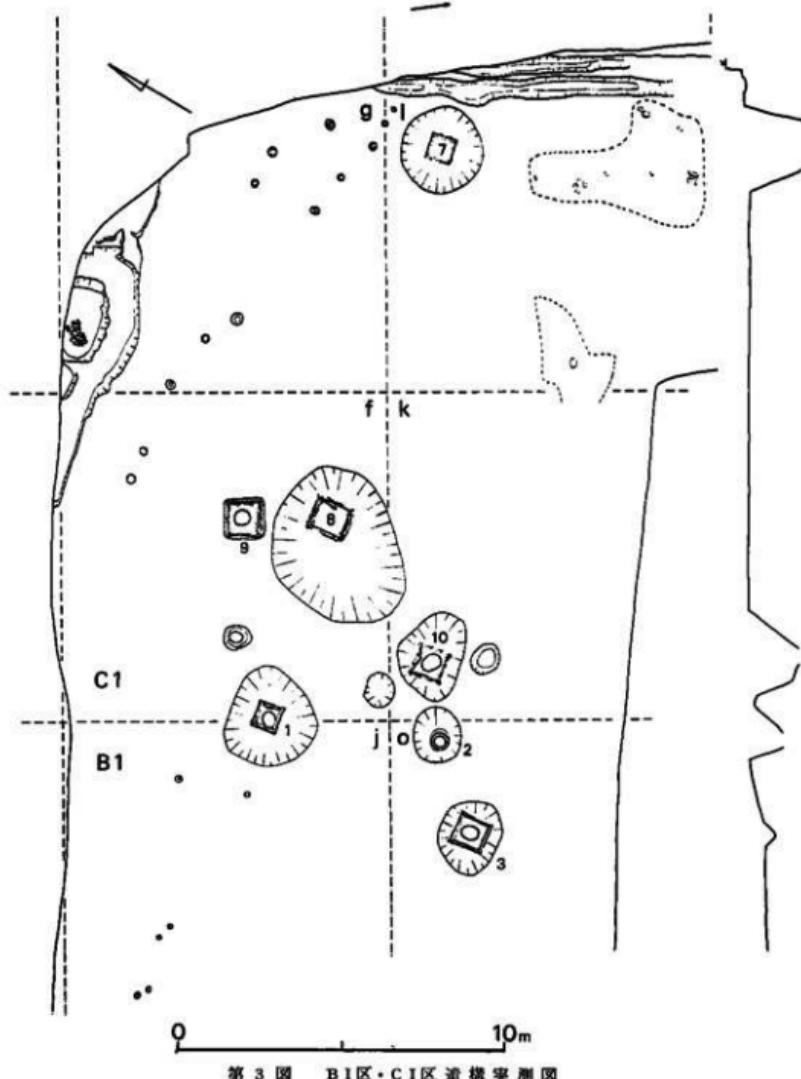
遺構相当面である暗かっ色土直上には、C1-g・1区で、握拳大の礫が分布するかっ色ないし黒かっ色土の部分的な広がりがあり、この中からは、陶磁器や、土師質土器の破片が出土する。しかし、この土層も砂を多く含み、二次的堆積と考えられる。

C1-g区では、第7号井戸の北側に、東西に柱穴がならんでいる。大部分が径20~25cm、深さ約20cmで、特に東よりの第7号井戸に近接したものは、南北2mの間隔で2列にならび、内部に根石をもつものも3か所あり、覆屋の存在が考えられる。柱穴はB1-j区にも6か所あるが、まとまりをもってとらえることはできない。

第7号井戸の東側では、掘り方に近接して、断面が半円形を呈する2本の溝があり、南から北にのびて流水敷の方向へ向っている。溝幅は、上端で50~70cm、深さ20cmで内部には砂が堆積し、遺物は含まれていない。

C1-g区北端では、長さ11mの東西に広がる落ち込みがあり、2段になって調査区北縁に続いている。落ち込み上端からの深さは、上段が30~50cm、下段が70~80cmを測る。内部は、上層に暗かっ色土、下層に砂層があり、上層から瀬戸、常滑、備前焼などの陶器類や土師質土器片などが出土した。また砂層

上には疎の分布があり調査区北壁に続いている。この落ち込みの性格は調査区の制限もあって、あきらかでない。



第3図 B1区・C1区造構実測図

土壤は3か所あり、いずれも径1m前後の円筒状ないしはすり鉢状に掘り込まれ、内部には二次的な砂の堆積があった。

特に、C1-f区第1土壤は、1969年調査のD1区ピットと同様、底部に曲物をえたものである。プランは、南北径83cm、東西径76cmの不整円形で、2段に掘り込まれており、深さは1段目が30~40cm、2段目はさらに10cm深く垂直に掘り込まれ、この中に径約35cm、高さ13.5cmの曲物をえている。曲物は三重のうす板をとしたもので、この中から珠光青磁片、大型管状土錐1点が出土している。

井戸は、後に詳述するが、C1-f区からB1-0区にかけて、東西9m、南北13mの広がりの中に6基が集中的に分布しており、井戸構築上かなり条件のよい地域であったらしい。

(金井 龜喜)

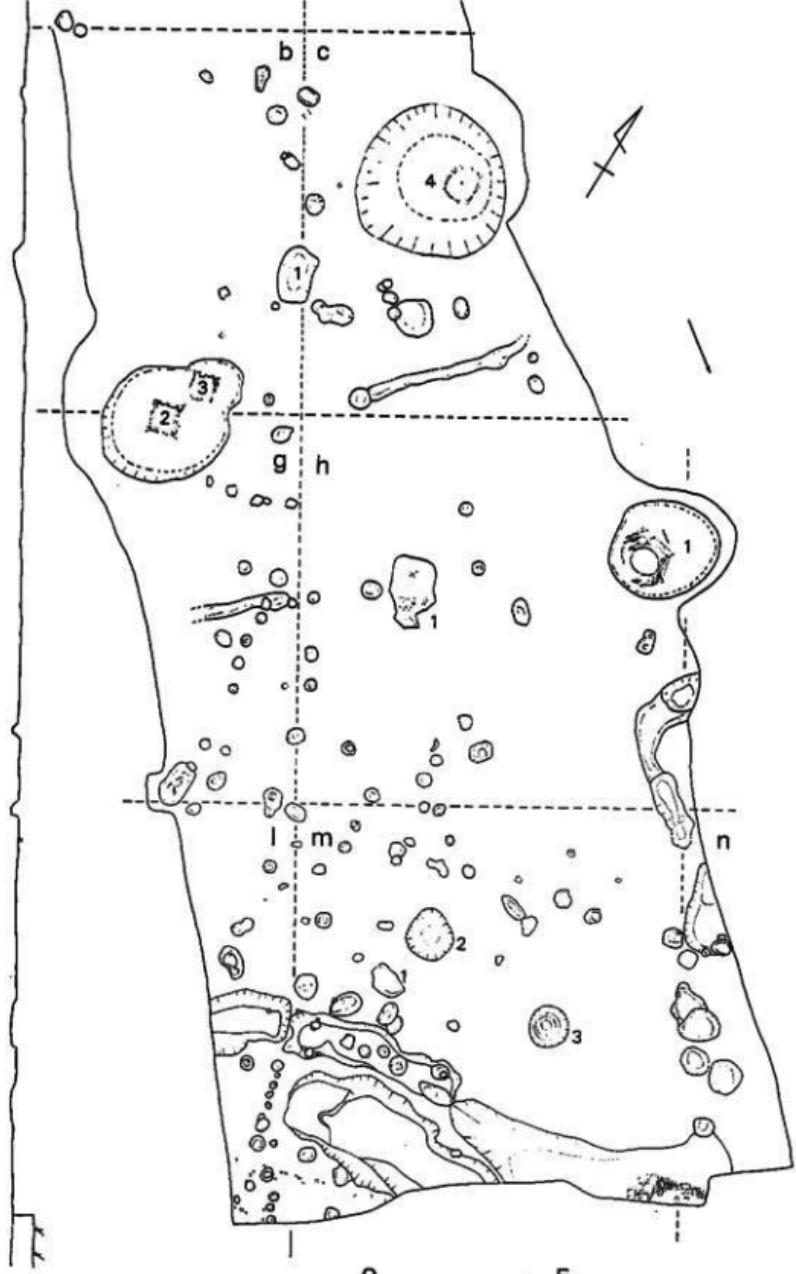
b C2区の柱穴・土塗・溝状遺構(図版2)

遺構面は、表土下約100~120cmのところにあり、表土の砂層を取り除いたところ、溝および溝状遺構、敷石、杭、土塗、柱穴、井戸などの遺構があきらかにされた。遺構の残存状態は比較的良好であるが、調査区東半の流水敷よりも過去の出水により一部削られて、柱穴、礎石の状態が不明になっている。

ここでは、井戸と人骨埋葬土壤を除くすべての遺構について、報告することにする。

溝および溝状遺構は1・m・n区にわたる長く幅の広い敷石の下に存在するものと、c区、g区にみられる幅の狭い浅いものとの2種類があきらかになった。

c区における溝はC2区第4号井戸の南4.4m附近にあり、c区南端を南西から北東に向っているもので、幅25~50cm、深さ12~20cm、長さ4.2mをはかる。溝の西端は径55cm、深さ21~28cmの柱穴と切り合っており、東端は浅くなつて途切れている。



第4図 C 2区造構実測図

g区の溝は、区の中央を東西に走っているもので、幅30~40cm、深さ7~20cm、長さ2.4mで、C2区第2号井戸の南5.25mのところにある。東端は径20cm、深さ21cmの柱穴と切り合っており西端は途切れている。

h区の東端流水敷寄りには、幅30~100cmの溝がm区との境界附近より始って北に延び、ゆるく東にカーブして本流の方へ向っている。この溝は最初の2mは深さ25cm、東壁にぶつかるところは、深さ31cmの壙状となっており、その間を深さ9~13cmの浅い溝で連続させたようになっていた。

これらの溝は、暗かっ色土を内部に含み、土師質土器片を若干混入しているだけで、その性格はあきらかでない。上述の溝と異なり、l・m・n区にみられるものは、溝というよりもむしろ敷石遺構と関連をもつ溝状遺構といえるものである。

l・m・n調査区の南半約4mまでのところは、広く帯状に炭を混入した暗青かっ色土が一面に広がっており、その上部には、径5~30cmの角礫が敷きつめられ、たたきしめられたようになっていた。その跡は一定したまとまりはないが、その敷石遺構下の溝状遺構を暗示するかのように西半のものと、東半のものとに群割されていた。その敷石並びに暗青かっ色土を取り除くとその下に東西に延びる溝状遺構2つがあきらかになった。その1は、m区西端から東の調査区の壁に向っているもので、幅18~23cmで2段に握り込まれている。西から始った溝は深さが14cmあるが、約1mのところではさらに5cm落ち、壁近くで23cmの深さに達している。溝の内部は黒色粘土がつまり、土師質の塊が多量に発見された。

もう1つの溝は、その北側に平行して走っているもので、l区の西壁から延びm・n区の壁に向っているものである。この溝はその深さより3つに大別できる。幅110~130cm、深さ23~35cmで東に延びて来た溝は西壁より205cmのm・n区の境界あたりで稜線をつくって東の溝と区画し、つぎの溝幅100~120cm、深さ8~19cm、長さ4.5mのものへと続いている。溝の中には10~30cmの礫が落ち込んでいたり、径25~30cmのピットがみられた。これに続いて東に向う溝

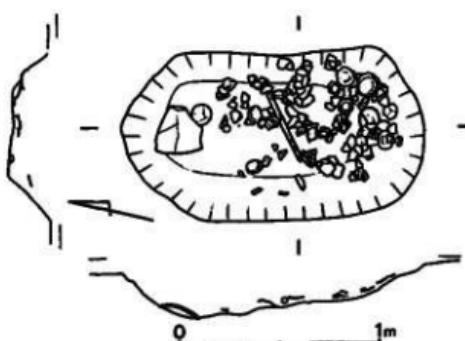
は幅115cmから次第に広がりをみせ、東壁部に入り込んでおり、その掘り込みは2段となっていた。上部の礫を取り、暗青かっ色土を除くと深さ30cmの1段目の溝があらわれる。その下部にはうすい砂の堆積層があり、これを取り除くと2段目の掘り込みとなり、遺物を含んだ青色粘土が落ち込んでいる。従って、この溝は1段目と2段目の掘り込みとで2時期とみてさしつかえない。またこの溝の南東隅では敷石遺構の一部が検出された。この敷石は上部の小礫を取り除いていった最下部にあったもので、層位的には1段目の溝の下部砂層直上の黒土上部にあったものである。径5~30cmの礫を重ねてあり、特に西辺部は大きな礫を置いている。これを、道路とみると、建物の遺構とみると、部分的であきらかにしがたい。この敷石遺構と溝の関係についてみると、2段目の溝よりは新しいことはいうまでもない。しかし1段目の溝も、2段目の溝も、出土遺物からみて時期的には大した差はみられず、ただ先後関係としてとらえられるだけである。

また上部の敷石、暗青かっ色土を取り除くとこれら溝状遺構とともに、大小のビットがあきらかにされた。それは南側の溝状遺構に平行した径40~55cm、深さ22~41cmの大きなビットと、そのビットに直角に北に延びるような径15cm前後の小さなビットである。前者のビットは柱穴の可能性もあるが、後者の中には中に杭の一部の残っているものがあり、溝の南側に平行に走る杭列と関係をもつビットと思われる。遺物は土師質土器が圧倒的に多く、東側の敷石の周辺では古銭も出土している。

この溝状遺構の南には東西に走る杭列が2列並んでいた。径5cm前後の丸杭あるいは角杭を使っており、1965年度の調査の際にみられた北から南に向いさらに西にのびる杭列に連続するものと思われた。

またb区西壁寄りに径約3mの円形の暗青かっ色土の広がりがあり、その上部に径5~60cmの礫が一面に敷かれていた。当初何らかの石組遺構と思われたが礫を取り除き粘土面を削平したところ、C2区第2号、3号井戸の掘り方があらわされた。

つぎに土壤についてみれば、この土壤は類別してみると内部に土師質土器などがつまっている浅い円形のものと、それ以外のものがある。前者のものとしては、b・c区の境界に1、c区1、h区1、m区1、n区1の5箇所があきらかにされている。これらの壙のうち、流水路に近いn区のものは、残存状態がよくないが他の4つの土壤の壙内は暗青かっ色土がつまっておりその底は浅くて底にはりついたような形で土師質土器などが発見された。

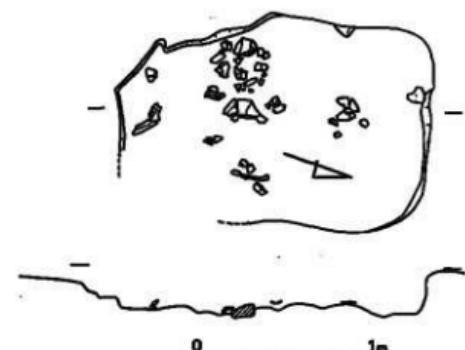


第5図 C2-b区第1土壤実測図

b・c区境界にある土壤は短径80cm、長径150cm、深さ15~20cmの長円形のピットで、底に土師質塊多数、土鍋片、備前焼すり鉢、鉄製刀子、スラグ、布片が発見された。

h区のものは短径110cm、長径170cm、深さ15~20cmの隅丸方形のピットである。内部より土師質塊、瓦片、鉄釘、鉄製刀子が発見され石が数個落ち込んでいた。m区のものは径100cmあまりの円形の壙で、深さ10~25cmで土鍋が落ち込んでいた。

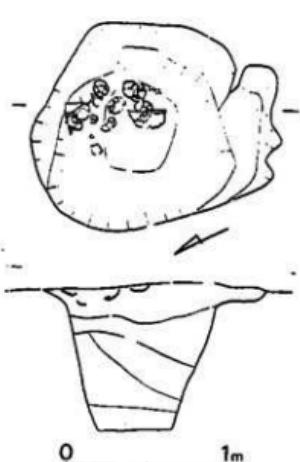
それ以外の壙として、m区に2箇所発見されている。西側の第2号ピッ



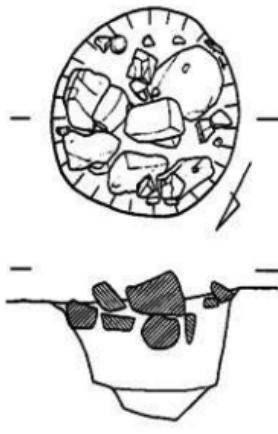
第6図 C2-h区第1土壤実測図

トは、径130~140cm、深さ90cm、底径45~60cmを成す円形のピットで、内部は

5層に分かれていた。遺物は暗青かっ色土に少量の黄かっ色土を含んだ約25cmの第1層に多く、それも上部に多くみられ、その他の層はほとんどみられなかった。遺物として土師質塊、土鍋片などがみられた。またどの層にも炭を混入しており第4層には特に多く、木片も多量に含んでいた。その他、第2層では獸骨片が出土している。



第7図 C 2-m区第2土壤実測図



第8図 C 2-m区第3土壤実測図

東側の第3号ピットは、径100~110cm、深さ65cmの円形のピットで、2段に掘り込まれている。上部には径20~30cmの比較的大きな疊を置き、その周辺に土師質塊、土鍋片、鉄釘を包含していた。また内部よりかんざしが出土している。

柱穴遺構は径20~30cmのものが多く、大小合わせて約100個あまりを数えた。g・1区とm区の西半に特に集中しているようであるが、2つの穴が連続して瓢形になったものや、柱穴の底に根石のあるものとそうでないものがあるよう、数次にわたる建て替えの柱穴があるため、その規模を知ることは非常にむづかしい。

1・m・n区の溝状遺構の北西部で溝と平行した位置に、径60cm前後、深さ35cm前後の柱穴があるが、これを建築址とみると、東西2.15m間隔で2間以上のものが考えられる。しかし南北はあきらかでない。

またC2区第4号井戸を方形にとりまくような径40cm前後、深さ20cm前後の柱穴も建築址とすると東西2.75m間隔で2間、南北1.7m間隔で2間のものが想定できる。しかしこの柱穴は北側があきらかでなく、井戸に関係をもつ柵的なものとも考えられる。

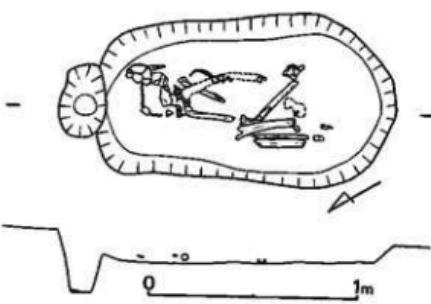
1・m・n区の溝状遺構と柱穴、土壌などの時期的な関係をみると、溝状遺構と柱穴、土壌などは同じ遺構面にあり同時期とみてよく、溝状遺構の上部にある敷石遺構はそれよりも若干新しいものといえる。また南側の溝状遺構が2段の掘り込みで2時期であり、敷石との関係をみると3時期との可能性もあるので、全体としては3時期あるいはそれ以上といえよう。しかしいずれにしても遺構は鎌倉期のものであろう。
(中田 昭)

c C2-g区の埋葬土壌

人骨は調査区西縁のC2-g区暗かっ色土層上面に、土壌に埋葬された形で発見された。

土壌は暗かっ色土上面で長さ145cm、幅77cm、深さ中央で約12cm、底面は水平に掘られている。プランはほぼ南北を長軸とする橢円形で、人骨は頭部を北にした右下の側臥屈葬状態で墓壙の中で北寄りにある。現存の人骨は土圧で損壊しレベルとして最も高い頭部でさえ底から10cmに満たない高さにあるが、埋葬時における遺体本来の高さからすれば現存の土壌では、当然身体の一部が露出することになる。従って暗かっ色土からではなく、さらに高い位置から掘り込みが行なわれたものと考えることができる。

土壌と人骨の関係は第9図の如くであるが、土壌の大きさは側臥屈葬の人骨よりやや大きめであり、下肢骨寄りではさらにやや広めに掘られている。これは土壙を遺体にあわせて掘った結果によるものと考えることができる。



第9図 C2-8区人骨埋葬土壙実測図

人骨は顔面を西に向け、右尺骨・橈骨は肘の部分で強く曲げ掌の部分を下顎の下におき、左上腕骨は下肢方向へ真直ぐにのばしている。下肢骨は左右共に膝の部分で強く曲げ大腿骨を胸もと近くに引きよせている。脊椎はややわん曲し、ねこ

背ふうになっているが、これは埋葬時の無理な姿勢によるものか、年令によるものかあきらかではない。

埋葬にあたっては、遺体には直接土がかからないようになんらかの被覆がなされたものと思われるが、それらを実証すべき遺物は発見できなかった。しかし副葬品には後頭部から茎に木質を残した長さ20cmの鉄製刀子、後頭部上には土師質土器がそれぞれみられた。

なお、この土壙北側に接し、径25~35cm、深さ30cmの礫がみられたが、これは墓壙が掘られた後に掘られたもので、その位置、深さからして墓壙に関係するもの、例えば墓標ようなものが立っていたかもしれない。

人骨についてはまだ鑑定をうけておらず詳細をあきらかにしがたいが、歯は相当磨滅しており、老年または壮年を思わせ、時期については鎌倉期の遺構面よりはあきらかに高い位置から掘り込みが行なわれていたこと、副葬されていいた土師質土器小皿が新しい様相をもつことなどから、古くとも室町時代以後のものとすることができよう。

(小都 隆)

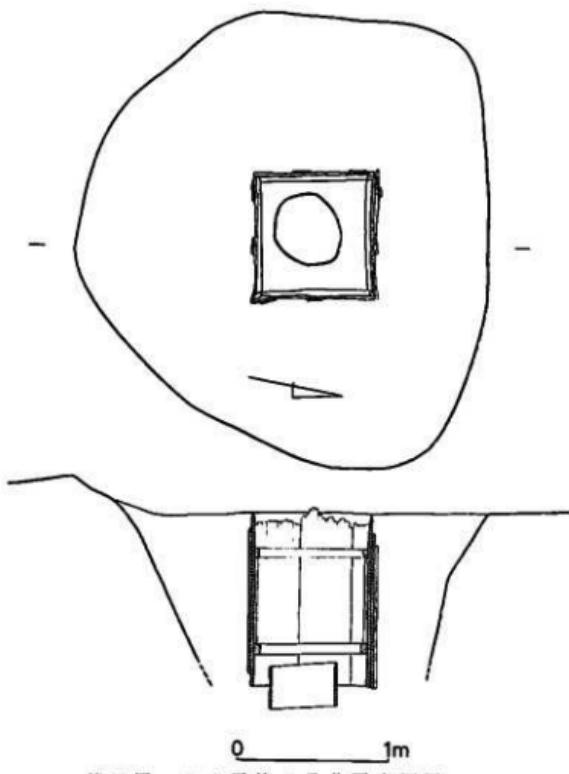
d B1区第1号井戸

遺構相当面と考えられる暗かっ色粘土上面を削平していると、B1-j区とC1-f区にまたがった径約3mの不整円形プランをもつ青灰色土の広がりが

あきらかになった。その青灰色土の中央に一辺約80cmの方形の井戸が青色粘土でおおわれて据えられており、井筒の上端の一部がのぞいていた。

井筒は、幅30cm前後のたて板を各辺に3～4枚づつ用い、その間際に添木をあてたもので、添木はたて板よりも短いものが使用され、いずれも釘でとめられていた。たて板は長いもので現存長117cmをはかり、湧水砂層より約15cm下に据えられている。

横棟はたて板の下端よりそれぞれ20cmと85cmの上、下2段あり、その間は四隅の角柱で支えられている。横棟は、長さ約70cm、巾3～5cm、厚さ5～7cm



第10図 B1区第1号井戸実測図

の角材をほぞしで組み合わせており、その組み方は上段のものは、北と南の棟にはぞを作り出し、東と西の棟にはぞ穴をうがっている。下段ではその関係が逆になっている。

井戸底には長径50cm、短径45cm、高さ30cmの曲物が据えられており、横棟の下端から6cmのところにその上端がある。この曲物は二重につくられており、桜皮でとじられているが、その合わせ目は外側と内側のものとでは、正反対の位置にある。また上端は約6.5cmのたがでしめられ、これも桜皮でとじられている。

井戸の掘り方は、遺構面より約1m下の湧水層に向って傾斜をつけて掘り込まれており、掘り方内の土は、上部約10cm程は青色粘土であるが、その下は湧水層まで灰色の砂となっていた。井戸内の青色粘土は井筒上端から75cm下のところで径10~30cmの角陣に変わり井戸全体にびっしりと敷きつめられ、それは曲物の上端の面および、曲物の中まで達していた。また曲物の外側は灰色の砂で石はない。

出土遺物は、掘り方からはほとんど出土せず、井戸内部の青色粘土中に多く、曲物片、砥石、土師質皿、土鍋、備前焼甕、亀山焼破片、桃の種などが出土し、またその下部の隙中より、土師質小皿完形品、常滑焼甕、備前焼すり鉢破片などが発見されている。

井戸の上段の横棟の上には、井戸の上部構造としてつかわれたかと思われる木材が、各辺に1~2本づつ重なっており、井戸の中央部には、両端が凹状に切り込まれ、一端に縄を巻きつけた角柱が斜めに落ち込んでいた。

(中田 昭)

e B 1 区第2号井戸

B 1 区第2号井戸はこのあたりに往時の地下水脈が通っていたためか周囲をC 1 区第10号井戸、B 1 区第1号井戸、B 1 区第3号井戸の各井戸によって囲まれており、遺構面である暗かっ色土層に長径1.70m、短径1.45mの楕円形ブ

ランの掘り方をつくり、このほぼ中央に曲物を2個以上重ねて井戸としたものである。

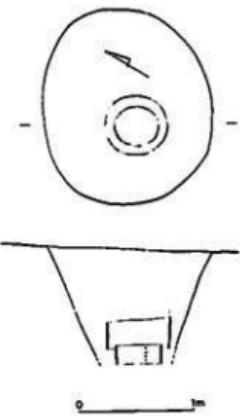
井筒は、地表下約55cmのところに木質部の残骸がみられたことによりあきらかになった。井戸は、腐蝕がはげしくほとんど原形をとどめていないが、長径55cm、短径50cm、現存高さ27cmのいびつになった曲物井戸であった。曲物は厚さ0.3cmの薄い板の片側にたて方向に無数の細線を刻んでそれを内側にして2重に巻いたもので、接合部は7cm重複させて幅0.5cmの桜の皮でとじている。

この下には同じく長径40cm、短径36cm、高さ16cmのややいびつになった曲物をすえており、上部の曲物と高さにおいて3cm重複させている。この曲物も上部の曲物と同様のやり方で厚さ0.3cmの板を一重に巻いたもので、接合部は6cm重複させ、内外面ともにその端をけずって角をなくし、幅0.7cmの桜の皮でとじている。

井戸構築にあたっては、掘り方は湧水砂層まで掘られているが、井戸の底枠はそれより17cmも上に設置されている。これは湧水砂層からの湧水がはげしかったため底枠をその部分まで下げることができなかったためか、あるいは底枠自体が浮き上ったためと考えられる。また、井筒を構成する曲物は現在下部しか残っていないが、井筒下端より当時の生活面と考えられる暗かゝ色土層上面までは90cmもあり、少なくともその部分までは井筒があったはずであるから、この曲物の上にさらに2~3個の曲物が重ねられていたことが考えられる。このことは1969年度の調査の際草戸大橋上流から発見された第2号曲物井戸の状況からもあきらかである。

なお井戸内からは刀子1点、竈泉窯青磁片、土師質小皿、壺の破片が各少量と曲物破片が多数出土した。

(小都 隆)



第11図 B1区第2号井戸実測図

f B 1 区第3号井戸

B 1 区第3号井戸はB 1 区第2号井戸の南約2mのところにあり、黄かっ色土層上面に掘られた東西2.25m、南北1.85mの梢円形の掘り方のはば中央部にある。この井戸は上下2段の横棧にたて板をうちつけ、その間隔と四隅にそえ板をあてがった1辺約100cmの方形の井筒と下底部におかれた曲物とからなる。

井筒は4辺ともに幅23~30cm、厚さ2~3cmのたて板4枚づつからなっており、現存長は70cm前後、下端はすべて鋸によりほぼ直角に切られている。

横棧はたて板の下端より下段は3cm、上段は60cmの位置にある。上段棧は1辺10cm前後の角材を東西をほぞ、南北をほぞあなとして組みあわせ、それぞれの角を釘により固定している。下段では径16~18cmの丸太を半分に割り、両端はさらに面とりして上段同様に組み、釘で固定したもので、平面になっている部分をたて板にあてがっている。横棧とたて板とはそれぞれ釘2~3本で固定されており、たて板は厚い精良な板を使用しているため板と板との間にすき間はみられないが、そのつなぎめにはそれぞれそえ板がつけられている。そえ板は幅6~20cm、厚さ1cm前後の板で、各辺ともたて板のつなぎめに3枚と4辺の角にそれぞれ一枚づつ配しているが、部分的には補強の意味もあってかさらに1~2枚を加えているところもある。これらのそえ板は、たて板と釘で固定した跡がみられないことから、井戸の構築時に補強のためにうちこんだものとも考えられる。

底にえた曲物は土圧のためか現在は南北55cm、東西45cmの梢円形になっており、深さは28cmある。構造的には内外2重になっており、内側は1枚板を幅0.5cmの桜の皮でとじあわせており、外側は内側に密着するようにして幅10cmと18cmの板をそれぞれつなぎあわせ内側と同じ幅になるようにしている。ただ内側のものはそのつなぎめは同じ幅でぴったりあわせるようにしているのに対し、外側のものはつなぎめでその幅がややずれて、またそのあわせ目は内と外とで反対側の位置にある。

このようにこの井戸は底にすえられた曲物と、方形の井筒とからなるが、現存の深さは105cm、掘り方上面からの深さは120cmとなっている。

井戸掘り方中からは土師質小皿、土鍋片、骨片、井筒内からは竜泉窯青磁片、景德鎮窯青白磁片、土師質小皿、土鍋、亀山焼土器片、須恵質陶器片、とめぐし等が若干みられた。

(小都 隆)

g C1区第7号井戸

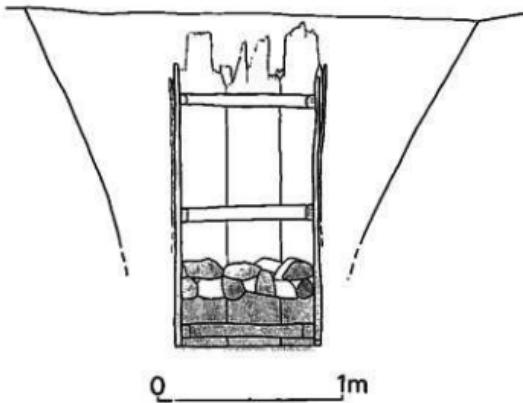
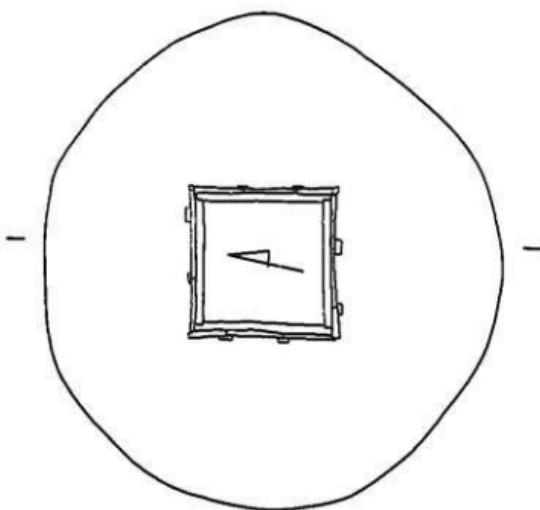
この井戸はC1—1区東縁を北から南に走る2本の溝にはば接してつくられたもので外法が一辺約80cmの方形井戸である。周囲にはこの溝の他、北側には数個の柱穴があり、南側には約1.5m離れて土師質土器を含んだ石群の分布があり南の方に広がっている。

井戸は遺構面である暗かっ色土層を掘りぬいた径約2.50mの円形プランの掘り方の中央に作られており、横桟3段をたて板で囲いさらにそえ板をあてた構造を有している。

たて板は各辺とも幅16~35cm、厚さ3cm、長さ160cm以上の3枚の板で構成されており、各板は長いためか厚手のものが使用されていることが特徴的で、内外面ともに細かく調整し、下端は直角に切り落している。構築にあたっては主に幅30cm前後の板を使用しており、それで足りない部分を同様の板から切ったと思われる幅の狭い板で補なっている。

3段の横桟はいずれも角材を用いている。下段のものはたて板の下端より5cmのところにあって7cm×5cmの角材を南北と東西をほぞ穴にして組み、中段のものは同じく下端より67cmのところで下段と同様に組んで、それぞれたて板一枚につき角釘3本ずつで固定している。上段のものは下端より130cmのところに組まれている。これら3段の横桟のうち、下段および中段は角材の原形を保っているが上段は使用痕と思われる磨滅があり上部の角がとれ丸みをおびている。

そえ板は各辺3枚のたて板の接合部それぞれにみられ、幅6~8cm、長さ90



第12図 C1区第7号井戸実測図
(アミ目は砂層)

cm以上、厚さ0.7~1.2cmの薄手の板を使用している。これらそえ板は釘等により固定されておらず、井戸構築時に各接合部にあてがわれたものと考えることができる。この他、たて板が直角に交わる四隅には3×3cmの角材がうたれているが、これらもその接点を補強すべくうたれた一種のそえ板とすることができよう。

井筒は湧水層である砂層に90cm埋めこまれており、井筒下端より25~30cm上部までは湧水層の砂が入り込んでいる。その上には10~40cm大の河原石が厚さ20~30cmにわたって敷きつめられており、これでもって湧水砂層からの砂の侵入を防ぎ井戸の浄化装置としたらしい。したがって井戸としての機能をもったのはこの部分より上と考えられ、遺構面であるかっ色土上面からの深さは130cmということになる。井戸内は河原石上面から上段横棟下10cmまでは青色砂層（下層）、それより井筒上端までは青灰色粘土層（中層）、井戸上は遺構面から流れ込んだ暗かっ色土層（上層）と3層に分けることができる。下層には木片が多く混入しており、下層と中層との境には木片のひろがりがあり比較的はっきりと分離できる。上層は掘り方から井戸内に落ち込むように暗かっ色土の堆積がみられた。このことは洪水等により埋没し、さらにその後徐々に自然に埋められていったことを示すのであろう。

井戸内には河原石直上に室町期のものと思われる備前焼大型甕の破片、漆器片がみられたほか、下層を中心とする渦巻文のついた瓦質土器、亀山焼、土師質小皿、土鍋、火舎、滑石製鍋等の破片、それに砥石、瓦があり、掘り方内には室町期のものと思われる備前焼甕、すり鉢、伊万里青磁、瓦質土器、土師質小皿、土鍋片がそれぞれみられ、井戸底と掘り方内にそれぞれ室町期に比定される遺物がみられたことから、室町期に構築、使用されたものとすることができよう。

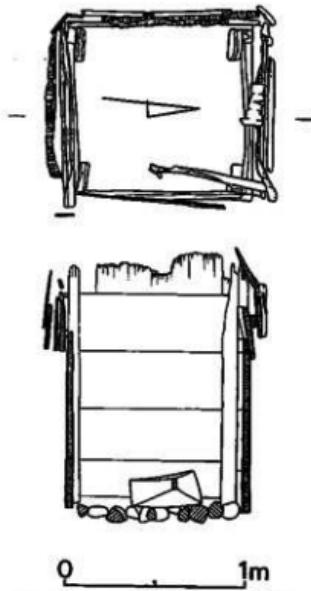
（小都 隆）

b C 1 区第8号井戸

本井戸は、C 1-f 区の南端付近から検出されたもので、西方約 6m には B 1 区第1号井戸、C 1-f 区第1号ピットが、また、南方には C 1 区第10号井戸、さらに北にはこの井戸に接して C 1 区第9号井戸が存在している。

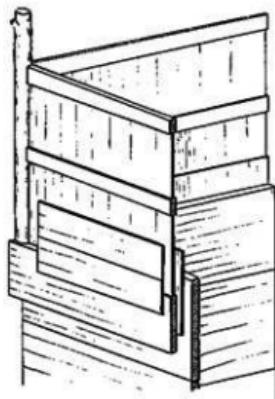
井戸は、地表より約 1.8 m の砂層下に位置し、本井戸および C 1 区第9号井戸上面の部分には粗粒砂を多く含む暗かっ色粘土層の拡がりが認められる。井戸の掘りこみは、この層の、下層にあたる暗かっ色粘土層上面からなされており、平面は南北方向に長い梢円形で、長径 2.3m、短径 1.9m をはかる。掘り方には粗粒砂を含む暗青色粘土層が湧水層である細砂層まで続き、それは非常によくしまっている。井戸は、掘り方の東寄りに構築されており、南北軸 1.3m、東西軸 0.9m で矩形を呈し、その遺存状態は比較的良好で井桁の一部が残存している。内部には 30cm ~ 50cm 大の疊が粗粒砂を含む暗かっ色粘土層上面から井筒の中央部まで密に詰め込まれ、それに続く層には薄い青色粘土層が、さらに下層には粗粒砂が続き、井筒下底面には握拳大の河原石が敷きつめられ、その上に 40cm 大の疊 1 個が置かれている。

本井戸の井筒の中央部より上部に疊が密につめこまれている状態からみて、意図的に廃棄されたものと考えることができよう。ただ、本井戸の廃絶が如何なる理由によつてなされたものか現状では詳かでなく、また、D 2 区第2号井戸（1969年度調査）にみられるような水位の低下による廃絶とは様相を異にしている。



第13図 C 1 区第8号井戸下部実測図

井戸の構造についてみると、井筒は四方に角柱を配し、それに横板をあてがって構築している。隅柱は、よこ5~10cm、たて15~20cm、現存長1.4cmの角材で、北東、南東の隅柱は他の2本に比してやや小さい。また、北西、南西の隅柱は3分の1を切り取っており、その部分を北西柱では北東に向け、南西隅柱の場合は南東に向いている。この外側に横板をそれぞれ4枚づつあてがって構築しているが、東西、南北では使用板幅に差が認められる。つまり、東西では幅20~30cmの板を使用しているのに対し、南北では最上部の板幅が8cmで、以下の板幅は30cmをはかる。このように東西、南北で高低差があらわれたのは、井桁との関係において生じた結果と考えるべきであろう。横板と隅柱とは、両方が尖ったくさび状の鉄製品を横板1枚につき2ないし3本の割りでうちつけて固定させ、また、隅柱の切り取りは、横板の固定をはかるとともに井筒の拡大あるいは汚水を防ぐということなどが考慮されたものと推測される。一方、北



第14図 C 1区第8号井戸上部模式図

東隅を除く三方の隅にはたて板をあてて汚水を防ぐようにし、また、東のよこ板のうち上段から3枚目の板材は内側にむかって大きな切り込みがあるために幅25cm、厚さ3cmの板を1枚重ねて補強するなど細心の注意をはらって構築していることは、本井戸構築に際して新しい板材だけを使ったものではなく、廃材を利用していることを示すものであろう。

井桁は、東西側と南北側とがほぼ同様の構築方法を示している。比較的良好に遺存している北側の状態から眺めてみると、井筒よこ板の上段ぐらいの位置からそれに接して幅30cmのよこ板をおき、外側に幅40cmのよこ木をあてている。よこ木には3か所のはぞ穴があり、二次的に利用している。それに接して薄いたて板2枚をならべ、さらに厚さ4cmのよこ板1枚を外側にえている。この上板上面の両端および中央部分には長さ5cm位のはぞ

穴が認められ、これらの板の上部にたて板をならべて桁側を構成している。南では、幅30cmのよこ板を井筒よこ板に北側のそれと同等位にすえ、また、幅30cm、厚さ0.5cmの薄いよこ板を2枚重ね、さらに厚さ3cmのよこ板がある。この外側に桁側板として比較的薄いたて板が用いられている。東側は良好な状態ではなく、わずかに井筒よこ板に薄いよこ板を重ねている部分のみが残存しており、桁側板などについては不明である。西側では、井筒よこ板にまずたて板をあて、そして外側には北側で認められたと同様のはぞ穴があるよこ板を重ね、この部分のみが残存している。

井桁の高さについては、桁側板であるたて板の腐蝕がはなはだしいために詳かでないが、東北隅から検出された現長65cm、上端部を枝のままで残し、他は面取をした桁隅柱に、下底から25cmと40cmのところにはぞ穴が穿たれている状態から推測すると、桁側板は2段に重ねられていたもので、下段は長さ25cmのたて板が、また、上段は20cm前後のたて板が用いられたものと思われ、井桁全高は50cm前後であったと考えられよう。このことは、井戸内部に詰め込まれた石の上端が井筒より約60cm前後の高さであることをも考慮すれば首肯されよう。

遺物は、掘り方より、土師質小皿片などが、また、内部より竜泉窯青磁片、土師質小皿、土鍋、角釘などがあり、井筒下底に敷かれた河原石上からは室町期に比定される備前焼の甕の口縁部が検出された。本遺物をもってただちにこの井戸の構築時期とするのは即断にすぎるかもしれないが上部の構造から考慮すれば室町期としてよいであろう。

(是光 吉基)

i C1区第9号井戸（図版 7a・8a）

井戸は、C1—f区のほぼ中央部、C1区第8号井戸の1.4m北側にあり、掘り方から接した状態で検出されたもので、地表より約1.8m下に存在する。掘り方は、暗かっ色粘土層上面からなされ、一辺約1.2mの正方形のプランを呈しているが、隅はやや丸みを帯びている。井戸は、井筒下部のみが残存しており、上面には腐蝕した板材が散乱している。井筒はこの掘り方一杯に構築され、東西軸1.1m、南北軸1mをはかる。掘り方の深さは暗かっ色粘土層上面

から約30cmで非常に浅く、また、井筒下部には曲物がすえつけられ、ほぼ円形に近い径50cm、深さ25cmの掘り方が認められる。この曲物の下底はちょうど湧水砂層の30cm上にあり、現在ではわずかな湧水が認められる程度である。

井筒についてみると、上部付近は腐蝕がはなはだしく、わずかに下底より40cm前後が残っているような状況であった。四方にはまず、一辺が4cm、長さ35cm余りの角材を非常に固い背色粘土層中に8cmから10cm前後埋めこんで隅柱とし、この上にたて10cm、よこ5cmの角材4本を組みあわせて横棟を構成している。東西側の横棟は各々両端をほぞにし、南北側では各々両端をほぞ穴にし、いわゆるセイロウ組の切込みを行なっている。

箇側板は、四方とも幅20cmから25cmのたて板をそれぞれ4枚横棟にあてがって構築している。この縦目部分の外側に、東では幅5~10cmの添木4枚を、西側では2枚、南側では3枚をあて、そのうち東寄りの添木にはさらに1枚重ねている。一方、北側では、4枚の添木を縦目にあて、東より2枚目の添木にはもう1枚重ねて汚水の侵入を防ぐようにしている。

曲物についてみると、現在、南北にやや長い梢円形状になっており、長径55cm、短径45cm、高さ24cmをはかるが、元来は円形を呈していたものであろう。曲物は、非常に薄い板を2枚重ねており、外側のそれは幅0.8cmの桜の樹皮を8回交差させて止め、また、内側のそれも同様に幅0.5cmの樹皮でとじており、その位置は対称的になっている。

本井戸内からの出土遺物は非常に少なく、土師質小皿、土鍋の破片が認められる程度で、構築時期を詳かにすることは困難である。ただ、本井戸は、井筒の遺存状態あるいは曲物内部の状態、特に他の井戸が湧水砂層中に構築されているのに対し、下底を湧水砂層より上に設置しており、湧水量はさほど多くなく十分な貯水ができなかつたと推測されることから、井戸として使用された期間は短いものであったと思われる。また、本井戸は飲料水を目的とした井戸と考えることはできず石積井戸と同様な意図のもとに構築されたものかもしれない。

(是光 吉基)

j G1区第10号井戸と土壤

C1—k区の暗かっ色粘土層上に部分的に広がっている黒かっ色土を北に向って排土していくと、グリッドの北西部より径約1mの土壙があらわれた。さらに、この土壙に接して、すぐ北側に井戸の掘り方が発見された。この掘り方は、直径約2.5mの不整円形のプランを呈し、上面の暗かっ色土の中央部に一辺70~80cmの方形のプランをした青灰色粘質土がありこの下部から井戸が検出された。上層の暗かっ色土は、20~40cmの堆積であるが、掘り方内の周辺では厚く、井戸のある中央部にいくほど薄くなっていた。その下は、砂を少し含んだ青灰色粘質土が湧水砂層まで続いていた。井戸の内部には、青灰色粘質土が掘り方の上端から約60cm下のところまでつまっていたり、この層からは遺物が多数出土した。また、井戸の上部構造と思われる板材や角材の断片などもこの層より出土している。

井戸は、内法が一辺80cmの方形プランの木組み井戸で、井筒の底部には曲物がすえてあった。

井筒を構成するたて板は、掘り方上端から約15cm下のところから残っており、各辺には3枚ずつ配してあり、その間隙と四隅には外側から添木があてがわれていた。板は現存長約1m、幅30cm、厚さ3cmで、上部の腐蝕は著しく、上端部は欠失していた。

横桟は3段あり、1段目と2段目の間は約30cm、2段目と3段目の間は50cmあり、3段目はたて板の下端より10cm上の位置にあった。1、2段は損壊が著しく、原位置よりずれているが、3段目は原形のままの状態であった。1段目は、南側の桟が残っているのみで、2段目は各桟とも残っていたが、井戸の内側に面する部分はかなり磨耗していた。また、2段目の組方は北側と南側の両端がほぞ、東側と西側がほぞ穴になっており、3段目は逆であった。2段目と3段目の横桟の間には、5cm角の支柱が四隅に立ててあり、1段目と2段目の間にも同じように支柱があったと思われるが、遺存していたのは東南隅と西南

隅の2か所のみであった。

曲物は、3段目の横棟の下端に接して砂層の中にすえられており、土圧のためか、長径67cm・短径50cmの梢円形を呈しており、高さは41cmをはかった。曲物は2重に作られており、内側は厚さ0.3cmの1枚板を使用し、外側は厚さ0.3cmで幅19cmと22cmの2枚の板からなっていた。いずれも10cm余り重ねて幅1cmの桜皮でとじあわせてあり、かなりしっかりした丈夫なものであった。内側は黒く炭化しており、斜行する細い刻線が多数入れてあった。

出土遺物は、井戸の掘り方より、亀山焼・常滑焼窓片、竜泉窯青磁片、土師質小皿（透明皿を含む）、土鍋片などが少し出土したが、ほとんどの遺物は井戸内の青灰色粘質土中より出土した。1段目の横棟付近より絹片と、管状土錐が出土し、その下より懸仏、漆器（椀）片、漆の塗ってある板片、下駄3点（内1点は子供用）、砧、曲物の底、櫛、とめぐし、布、竜泉窯青磁、常滑焼窓口縁部、亀山焼、瓦質土器、火舟、すり鉢、土鍋などの破片、土師質土器多数が出土した。

この井戸の構築された時期については、井戸掘り方から出土した遺物で常滑焼の口縁部が上下に拡張される傾向をもつものであることからみて室町期と考えられる。

土墻は、井戸の南側に接しているが、井戸の掘り方ときりあいの状態にあり、その状態からみて、土墻の方が時期的には新しいものとすることができる。土墻は上端部の直径1m弱、底部の直径0.6m弱の不整円形のプランを呈し、深さは約0.8mであった。中には砂が堆積しており、掘り込み上端より約10cm下の位置より土師質の塊が4点出土した。この下は、暗かっ色粘質土と砂が交互に堆積しており、遺物は検出されなかった。

なお、井戸のすぐ西側0.5mの位置にも径約1mの土墻が検出されたが、出土遺物はなく、暗褐色粘質土と砂が交互に堆積していた。深さは約0.5mで、ほぼ円筒形をなしていた。

(山県 元)

k C 2 区第1号井戸（図版9）

この井戸は、調査区の東縁に並んでいた井戸の一つで、C 2-h 区の東端にあり、掘り方の一部は i 区に及んでいた。

暗かっ色粘土面から掘り込まれた井戸の掘り方はほぼ円形のプランをなし、その直径は約 2.7m、内部には背味をおびる黒色の有機物を含む粘質土がつまっていた。井戸の木組みは、この掘り方の西寄りの部分にあり、背味をおびる黒色土を深さ約 25~30cm 取り除くとあらわれた。

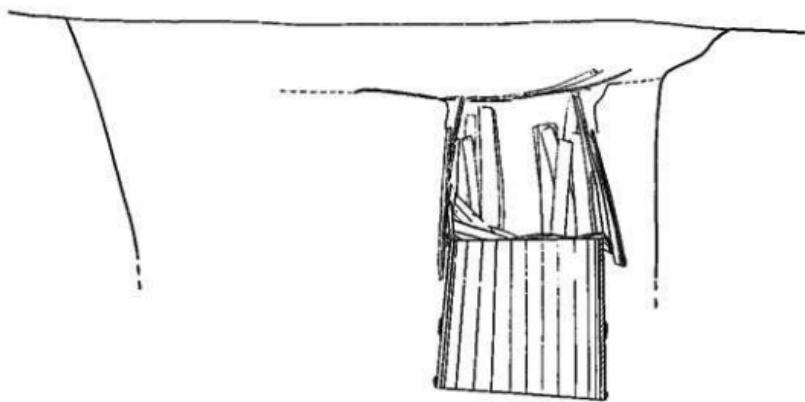
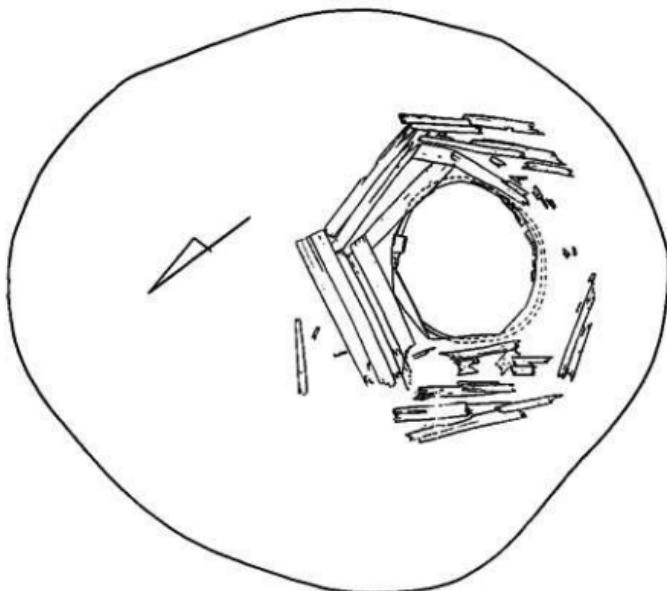
井戸内部には、背灰色粘土にまじって、握りこぶし大~人頭大の礫が落ち込んでおり、そのなかから、木片、土師質の小皿、備前焼のすり鉢などが出土した。井筒の下端は、現存する井筒の上端より、下方へ約 135cm のところにあり、このあたりが湧水面となっている。

掘り方の埋土からは、木片、とめぐし、漆椀、土師質の小皿、備前焼のすり鉢などが出土した。とくに、掘り方の上端から、約 110cm 下方で、黒漆の地に朱漆で木の葉を描いた完形の椀が出土するなど、相当深いところまで遺物を含んでいた。

井戸は、薄い板をほぼ円形に立てた上部構造と、狭長な板材を竹製のたがで締めた円筒からなる下部構造、それに上部構造を取り巻いて敷かれた薄い板の 3 つの部分から構成されている。

まず、下部構造についてみると、昨年調査した C 6 区第1号井戸、D 2 区第4号井戸の井筒とはほぼ同様の円筒が使われている。上端の幅 3~4 cm、下端の幅 4~5 cm、長さ約 70cm、厚さ約 2 cm の狭長な板材を 50 枚、竹製のたがで締つけて、円筒とし、それを湧水層である砂層に固定している。この円筒の直径は上端で約 65cm、下端で約 70cm をはかり、その差は約 5 cm となり、ちょうど、底を抜いた桶をふせた状態となる。

C 6 区第1号井戸、D 2 区第4号井戸において使われた円筒は狭長な板材を竹製のくさびで連結していたが、この円筒には、そのようなくさびを使用した



0 1m

第15図 C2区第1号井戸実測図

痕跡はなんら認められなかった。そして、この板材の長さはほぼ一定していて、これを連結した場合、その上端および下端において、極端な凹凸はみられなかった。さらに、すべての板材の内側には、上端から約30cm下方に幅約2cmの板状のものがあたっていたような痕跡が観察されこの部分に底板がはまっていたものと考えられることから、この井筒は、本来桶として利用していたものを井戸構築にあたって転用したといえよう。

円筒を外側から締めつけている竹製のたがは、C 6 区第1号井戸、D 2 区第4号井戸の円筒において観察されたものと同様のものであり、円筒の上端より約15cm下方に3段、その下端より約10cm下方に2段、そして円筒の下端に1段巻いていた。

これに対して、上部構造は、厚さ5mm前後の薄く、狭長な板材をほぼ円形に立てているだけで、相互の間隔も不定で、周囲からの土圧に耐えうる状態ではなく、そのために上端は相当内側に傾いていた。

この上端では、直径約50cm、下端で約75cmをはかり、下部構造の円筒と、その外側で、10cm前後重なり合い、この板と下部の円筒の間、円筒の上端付近には、2段の竹製たがが残存していた。さらに、このたがと円筒の間には、厚さ約2cm、幅約5cmの狭長な板材が1枚はさまっていた。

のことからみて上部構造と下部構造は、D 2 区第4号井戸のごとく、二つの円筒を積み重ねたものであったが、井戸の廃絶にともない、上部のみ抜き取られ、上部構造にともなうそえ板だけが残ったものと推定される。

上部構造の上端周辺には、厚さ5mm、幅5cm、長さ70cm前後の薄板が一面に敷いてあった。これは腐蝕が著しく、その状態を詳らかにしがたいが、その平面形は、基本的には井筒を取り巻いて、ほぼ六角形をなし、さらにその空間を補うように、薄板を敷きつめていたらしい。この施設は、上に井桁を置き、その沈下を防ぎ安定をはかるためのものであったと考えられる。

この井戸の構築時期は、井戸内部および掘り方の埋土から出土した備前焼のすり鉢の口縁部などから室町期に相当するものと考えられる。（伊吹 尚）

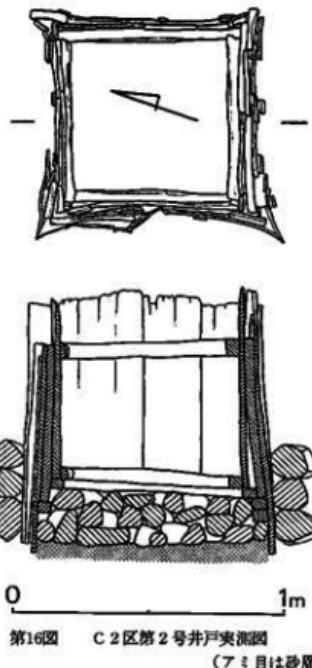
1 C 2 区第 2 号井戸および第 3 号井戸（図版 10 b）

C 2—b 区および C 2—g 区にまたがる方形の石積を除去したところ、うすい砂層の下に背かっ色土の掘り方が認められたことから井戸の存在が推定された。掘り方は当初長径約 3.5m、短径約 3m の長円形をなすものと思われたが、この掘り方の北東部で径 1.3m の掘り方が一部切りあいの状態で存在していた。掘り方の背かっ色土を掘り下げたところほぼ中央部で井戸のたて板の一部が露出し、また切りあった掘り方からも井戸の存在が認められた。掘り方中央部で検出された井戸を C 2 区第 2 号井戸、北東部の井戸を C 2 区第 3 号井戸とした。

第 2 号井戸は一辺約 70cm の内法をもつほぼ正方形の平面をなし、4 段の横桟を組んで四方を 3 重のたて板で囲んで井筒とした木組み井戸である。たて板はそれぞれ厚さ 2 ~ 4 cm、幅は広いもので 35cm をはかる。3 重に囲んだたて板のうち外側のものは現長約 1 m の板を 10 枚使用しており、下端から約 15cm 上に横桟を取り付け、たて板とは木釘を打ちつけて固定している。

横桟の四隅での組み方は東と西の桟がほぞ穴、北と南がほぞとなっている。ほぞは木口のほぼ中央部に長さ約 4 cm の突出部を設けたものであり、ほぞ穴は木口から溝を切り込んで、ほぞを差込んだ後に別の木片で溝をふさぎ、一見穴のように作っている。

中間のたて板は計 8 枚が使用され、たて板の最下部に横桟が取りつけられて外側と同様に木釘で固定しており、



第 16 図 C 2 区第 2 号井戸実測図
(アミ目は砂層)

外側の横桟よりも約5cm高い位置にある。横桟は東と西をほぞとし、北と南をほぞ穴として組んでいる。ほぞは桟の木口の井戸内側よりに設け、ほぞ穴をこれにあわせて掘り込んでいる。

内側のたて板は計9枚が使用され、たて板の最下部に横桟が木釘で固定して取りつけられ、しかもこれらが中間のたて板についた横桟上にのせられている。横桟は東と西がほぞ、北と南がほぞ穴となって組まれている。ほぞは桟の端から約5cmのところを切りこんで鍵状部分をつくり、さらにその中央部に長さ2cmばかりの突出部を設けている。ほぞ穴はそれを受けるべく溝を切りこんだ中に突出部に符合する穴を貫通させたものである。内側のたて板にはこの横桟より約50cm上にもう一段横桟がある。桟は東と西がほぞ穴、北と南がほぞとなって組まれ、いわゆるかね形3枚ほぞの仕口となっている。

3重に囲まれたこれらのたて板とたて板との間には添木が置かれ、それらが互に密接して外部から井戸内への土砂および污水の流入を防いでいる。たて板や横桟は井戸構築時の原形をほぼ留めておりたて板と横桟をこのように組み合わせて使用している例はこれが初めてである。

井戸内には曲物はなかったが、これにかわるものとして10~20cm大の礫が井筒の下端から約30cmの高さまでぎっしりと敷きつめられていた。また井戸の外側にも約40cmの高さまで礫がつめこまれており、井戸を外側から固定したものと思われる。

井戸内は青かっ色土から青色粘質土、礫をはさんで井戸底の湧水砂層となっており、出土遺物としては、下駄の差歛などの加工木片、小皿、鍋などの土師質土器・鉄釘、桃の種、炭化米などがある。また、井戸の掘り方からは多くの遺物が出土した。主なものとしては、備前焼の甕、すり鉢、片口付瓦質鉢、渦巻状の印文のある瓦質土器、土師質の皿、碗、亀山焼土器片、竜泉窯青磁片、鉄釘、ふいごの火口、とめぐし、などがある。

第3号井戸は一辺約60cmの内法をもつほぼ正方形の平面をなした木組み方形井戸である。井筒のたて板は厚さ2~3cm、幅は広いもので約30cm、現長は90

~100cm あり計12枚で四方を閉っているが西側の南よりが一部欠損しているので当初は13枚のたて板を使用していたものと思われる。たて板はほとんどのものがその外側両端を弧状の断面をなすよう削り、また下端は内側から外側に斜めに切りこんで先を尖らせ板を打ち込みやすいように加工している。たて板とたて板の縫ぎ目には添木が置かれ汚水の流入を防いでいる。たて板の下端から約40cm上に横桟が取りつけられ釘打ちされている。桟は長さ 58cm、幅 3.5cm、厚さ 4 ~ 5 cm 程度の木片を用い東と西にはぞ、北と南にはぞ穴を設け、組み方はかね形三枚ほぞの仕口である。井戸底には曲物が設置され、その上端は横桟の下端に接している。曲物は厚さ 3 mm、高さ 40cm の板を 2 重にめぐらして直径 52cm の円筒をつくり、外側の上端および下端を幅 5 ~ 7 cm のたがでしめている。またそれぞれの合わせ目は桜皮を用いてとじている。曲物の内側は不規則な多くの刻み目によって板を曲げやすくしており、また全体が黒ずんでいるので焼いたものと思われる。

井戸内の出土遺物としては土師質の小皿、土鍋、梅の種がある。

第 2 号井戸と第 3 号井戸は最も接近した部分で約 50cm の距離がある。

2 つの井戸の前後関係をみると、第 3 号井戸の掘り方が第 2 号井戸の掘り方によって切られていることから第 3 号井戸が先行するものであるが、出土遺物からは二つの井戸の時期的大差は認められず、また接近して位置していることから第 2 号井戸が第 3 号井戸にかわるものとして構築された可能性が強い。

(脇坂 光彦)

m G 2 区第 4 号井戸 (図版 8 b)

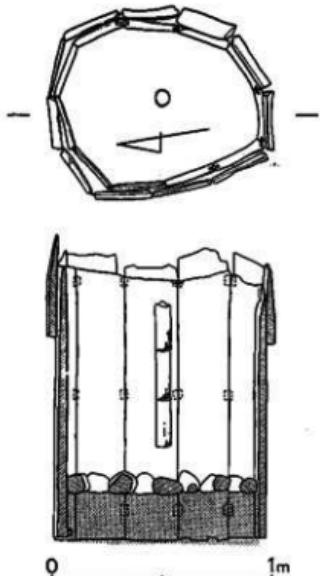
G 2 — c 区の西北部より検出されたもので直径約 4 m の不整円形プランの掘り方をもつ木組み井戸である。

掘り方上面では、西と南の隅に約 20cm 大の石が数個存在し、中央よりやや東側部分には東西 1 m、南北 0.5 m 余りの梢円形の固い赤褐色土のブロックが見られた。

掘り方の内部は、一部粘質土層もあるが、上端より下端まですべて砂層で、遺物はほとんど検出されず、滑石製鍋の破片が出土したのみであった。

井戸は、掘り方の中央よりやや東へずれた位置にあり、東西0.85m、南北1mの梢円形のプランをしており、11枚のたて板を楔でつないで囲ったもので、上下2重の構造になっている。上段のたて板は、下段のたて板の上部を外側から締めつける状態で約30cm重複して置かれており、上端部は腐蝕して欠失し、現存長約40cmを残すのみであった。下段のたて板も、上端部が擦り切れていたが、現存長約120cm、幅25cm前後、厚さが3~4cmあった。上段のたて板の下部には、下端から4cm前後の位置に、たて3~4cm、よこ7cm前後の長方形の穴が2つずつ荒くあけられているものが7枚あり、下段のたて板にも下端から6cm上の位置にたて3cm、よこ7~8cmの長方形の穴が同じく2つずつ荒く

あけられているものがかなりあったが、その意図・用途は不明である。楔は、大体たて4cm、よこ5cm、厚さ0.7cmの大きさのものの両側を削ってはめやすくしたものを使用しており、下段のたて板では3か所、下端から上に10cm、65cm、115cmの位置にあった。上段のたて板では上部が欠失しているため、下端より0.9cm上の位置に一か所残っているのみであった。楔をはめ込む穴はたて4cm、よこ1cm、深さ2~3cmを測った。下段のたて板はしっかりととめてあったが、上段はがたがたで、下に3cmあまりずり落ちている板もあった。たて板は、井筒の内側に面する側は平らにきれいに削ってあるが、外側は手斧のようなもので荒く



第17図 C2区第4号井戸実測図
(アミ目は砂層)

調整していた。各たて板は内側の幅が外側の幅よりも1～2cm余り狭く削られている。

井戸内部には、背みの強いかっ色の砂粒を含む粘質土が堆積しており、下部ほど砂を多く含むようになり、背みも薄くなっている。下段のたて板は、砂層の中に20cm余り入り込んでおり、井筒下端より20cm上面には、撫摩大の角礫や円礫がびっしりと散かれていた。また井戸の中央には、節をくりぬいた現存長約60cmの竹筒がたててあり、竹筒の上部は欠失していたが、下段のたて板上端より約10cm下から石敷の上にまで達していた。井戸廃絶に際しての習俗かもしれない。

出土遺物は、井戸内より、木製の柄の部分に「泉」の文字が荒く刻み込まれている鉄製の包丁が1点、有溝および管状の土錘、亀山焼土器片、備前焼すり鉢、瀬戸焼瓶子、土師質土器、土鍋、中国製青磁などの破片、とめぐし、鉄釘片、その他魚鱗、梅の種、栗の実、木くず片などが出土した。

(山県 元)

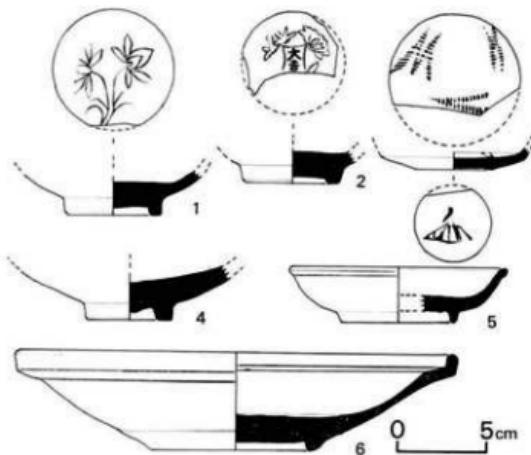
III 出土遺物

a 陶磁器・土器類（図版11・12a）

陶磁器

中国関係の磁器では相変らず竜泉窯青磁の出土量が多いが他に南方系の青磁（安南青磁？）が出土した。ほとんどが井戸内より出土したものである。

青磁（第18図） 1は器表に蓮弁文をもつ竜泉窯青磁鉢の底部で、底径が5.3cmある。高台は高さ0.8cm、厚さ0.6cmを測り、内側見込みには花模様が描かれている。2も鉢の底部で底径が5.5cm、高台の高さ0.9cm、厚さが0.8cmある。見込みには花模様とともに大吉という銘があり明代のものと考えられる。3は珠光青磁とよばれる同安窯青磁の小皿で見込みには猫かき手文様を配してい



第18図 中国系陶磁器実測図

る。底径は4.2cmあり、わずかにくぼみ底となり、墨書が残っている。4は青磁鉢の底部で径が4.2cm、高台の高さ0.8cm、厚さ1.0cmを測る。5は、淡黄緑色の釉薬のかかる青磁碗で器高が3.1cm、口径が12.0cmである。口縁部はわずかに

外反している。6は草戸からはじめて出土した南方系（安南？）青磁大皿で、全体に厚さ1.5mmに及ぶ淡黄緑色の釉がかかっている。口径が24.5cm、高さは5.4cmあるが口縁下1.2cmのところからは器體はほぼ垂直に立ちあがっている。底径は8.8cmありそれに高さ0.4cm、厚さ1.0cmの高台がついている。

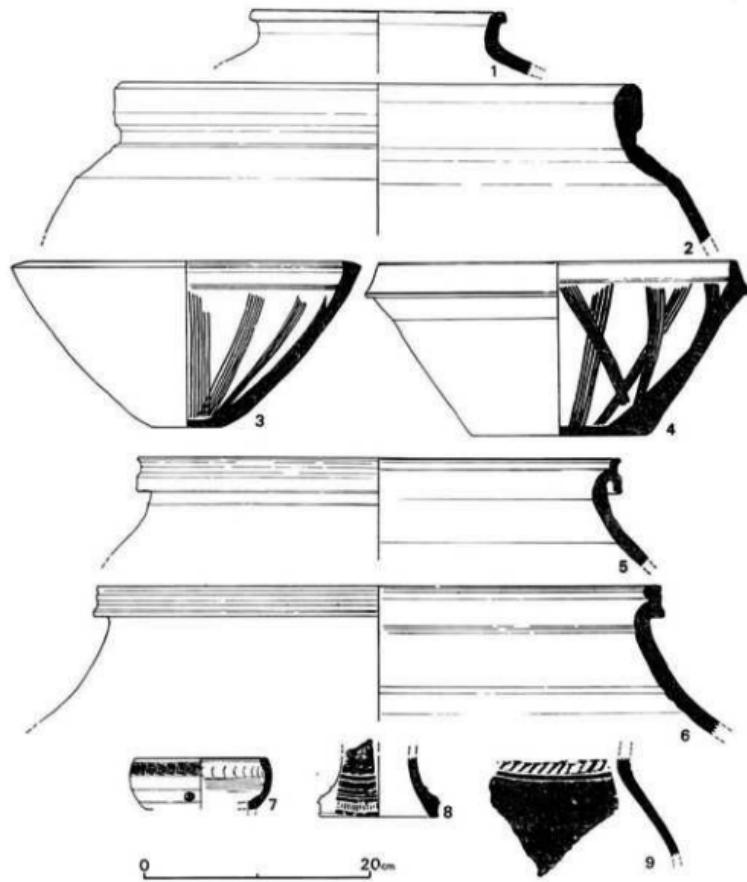
つぎに日本製陶磁器についてみれば、今までと同様に備前焼、瀬戸焼、常滑焼などが出土した。

備前焼（第19図1～4）1は口径22cmの壺の口縁部で灰青色を呈している。玉縁も小さく鎌倉初期のものと考えられる。2は口径45.3cmを測る大壺の口縁部で口縁部の玉縁は大きく下へおり返えされており室町期に下るものであろう。3と4はすり鉢で3は口径が30.8cm、高さが14.5cmあり、内側にはやや荒い条線が刻まれており器厚は0.7cm～1.2cmある。全体に水ひきによる調整痕が顯著に残っており、底部は丸底に近い平底である。4は、口径41.6cm、高さ15.1cmで内側に5条と6条の荒い条線が刻まれている。口縁部は、上下に拡張される傾向をもっている。底部は平底で径は15.4cmを測る。いづれも内側の条線が荒く少ないと、口縁部が内反していることなどから鎌倉期のものと考えられるが、4は3に比してやや時期として下るものであろう。

常滑焼（第19図5.6）5、6いづれも常滑焼大壺の口縁部で5は口径が42.2cm、6は49.7cmある。口縁は上下に拡張され、内側は肥厚する傾向をもっている。胎土には荒い砂粒を含み、暗茶褐色を呈している。室町期にあたるものであろう。

瓦質土器（第19図7～9）7は、口径11.7cmの火舍である。高さは脚が欠損しておりあきらかでないが身の部分の高さは4.5cmある。肩部の凹線の間には渦巻状の印文を配している。

また、口縁より3cm下のところにも凹線の間に6角状の印文をところどころに配している。8は、脚の底部で底径は10.4cmある。

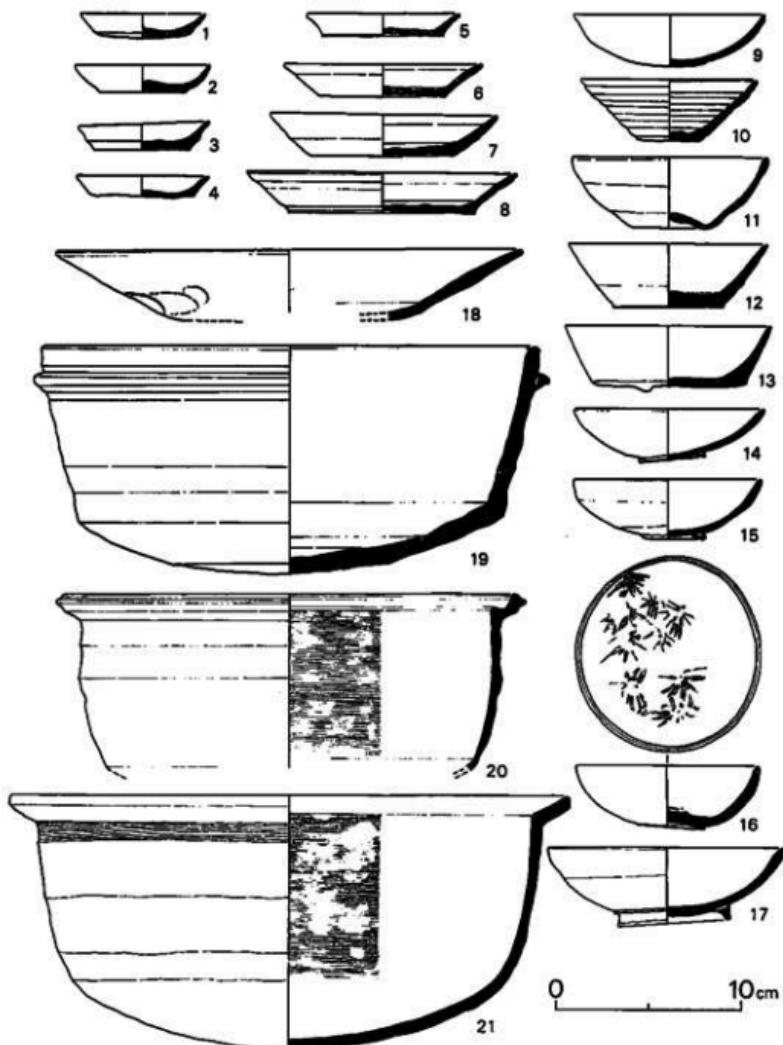


第19図 備前焼・常滑焼・瓦質土器実測図

柄まわりには、渦巻状と平行な短線状の刻み目がある。9は、壺の肩部で頸部には斜行の圧痕がある。いづれも井戸内より出土したものである。

土師質土器

いづれも既出のもので小皿、塊、釜、鍋などの日常什器である。



第20圖 土師質土器実測図

小皿（第20図1～8） 口径が6cm～15cm、高さが1.5～2.5cm前後のもので口径に比して高さの低い特徴をもつ。底部は平底でへらにより調整している。

塊（第20図9～17） 口径10cm～12cm、高さ3～4cm前後の大きさのもので丸底のもの（9）、凹底のもの（10, 11）、平底のもの（12, 13）、高台をはりつけたもの（14～17）の4種類が出土した。いづれも焼成はよく、水ひき痕もよく残っている。16は、はりつけ高台をもつ塊であるが内側見込み部に筆の葉模様の墨書きが残っている。

大皿（第20図18） 口径25cm、高さ3.7cmの平底の大皿で乳白色を呈しており焼成も堅ちである。口縁部はわずかに外反している。

釜（第20図19）、鍋（第20図20, 21）は、口径が25～30cm、高さが12～14cmの大きさもので器内外にすすぐ付着している。焼成はよく灰白色を呈している。

須恵器・土師器

C1区の鎌倉期の遺構面と考えられる暗かっ色粘質土の下約30cmのところから密集した状態で出土した資料である。

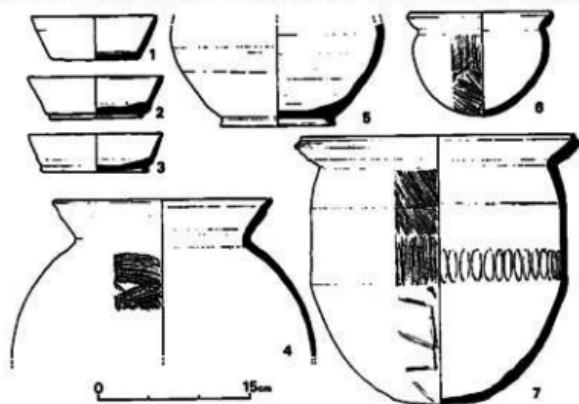
須恵器

坏（第21図1～3） 平底のものと高台付のものとに分類される。1は平底の坏で口径が12.3cm、高さが4.2cm、底径は8.4cmを測る。

焼成は堅ちで灰青色を呈している。2、3は高台付の坏で2は口径が13.3cm、器高が4.2cmある。器厚は底部の厚さ0.7cmに比して立ちあがり部分は薄く、口縁部はわずかに外反している。高台は、底部の周縁より0.5cm内側にはりつけられており高さが0.4cm、厚さは0.5cmある。焼成はやわらかく内側は灰白色、外側は暗灰色を呈している。胎土には砂粒を含み、底部はへらによる調整をしている。3は口径13.2cm、器高3.7cmで器壁はややうすく、口縁部がわずかに外反している。底部は高さ0.5cm、厚さ0.6cmの高台をはりつけておりへらにより調整している。暗灰かっ色を呈し、焼成も弱い。

変形土器 4 は、口径21.5cm、頸部の径17.1cm、胸部の最大径が29.9cmある。器厚はうすく0.5mmであるが口縁端直下ではやや肥厚している。器表面には、け目痕とすすぐよく残っている。頸部内側のつぎ目部では、器壁がはり出しがなしている。

5 は台付長頸壺と思われるが上半部が失われている。底部には、高さ0.8cm、厚さ0.7mmの高台がついており底径は11.1cmある。胸部最大径は20.8cmで内外側に水ひきによる調整痕が顕著である。胸部には自然釉がかかり焼成はよい。



第21図　須恵器・土器実測図

土 器 器 (第21図 6, 7)

6 は小形丸底土器で口径が胴径よりやや大きい器形をなすものである。口径13.8cm、高さ10.1cmの器の口縁部はくの字形を呈するが口縁端は垂直にもちあがっている。赤かっ色をなし、焼成、調整ともよくない。器表面には荒いけ目痕が残る。

7 は口径26.7cm、高さ26.5cmの変形の土器で茶かっ色を呈している。胸部の張りは弱く中央部の約7cmほどは器壁は、ほぼ垂直になっている。胸部の最大径は25.2cmで口径よりわずかに小さい。口縁部はくの字形を呈するが口縁端部は垂直にもちあがっている。器表面にはけ目、水ひき痕が残り、下半部にはすすの付着が著しい。器壁内側の胸部は指頭により調整している。

これらの土器群が一括して出土した地域は、土層の状態がよくなく遺構としてとらえることはできなかった。しかし土器群は約1.5mの範囲に密集した状態で発見され器表の磨滅も少なく、しかも鎌倉期の遺構相当面より下にあること、また、土器も器形や底部の状態から平安期に比定されるものであることなどからみて草戸千軒町遺跡の上限をさぐる資料の一つとして貴重なものといえるであろう。

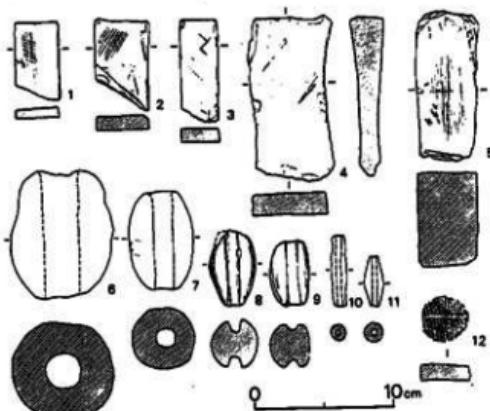
(河瀬 正利)

b 石製品・土製品(図版13b)

石製品は、溝状遺構や井戸から砾石が多く出土した。その他、滑石製鍋の破片などがある。土製品は、今年も土錘の出土があったが、他に円形土板や、かまどの破片などが出土した。

砾石(第22図1—5) 3は、幅2.5~3.5cm、厚さ1cm弱の小型うす手で、緻密な仕上砥のようである。両側面と小口には、母岩から切り取った擦痕が残っている。1、2はC2—m区の溝状遺構から出土し、前者は黄かっ色、後者は乳白色を呈する。3はC1区第8号井戸からの出土で暗灰色を呈している。4、5は砂岩でできており、乳灰色を呈する。前者はC1—r区から出土し、幅5cm、厚さ1.5cmをはかり、中央部での使用が著しかったとみえて、両端よりもへこんでいる。後者は、B1区第1号井戸からの出土で幅4cm、厚さ7cm弱である。

土錘(第22図6—11) 6はC1—f区ピットから、7はC1区第10号井戸から出土した大型管状土錘で、長さは7~9cm、内径は2.5cmと1.4cmで、いずれも茶かっ色を呈する。6は棒状の物質に粘土塊をまきつけて内径とした痕跡があり、部分的にヘラで削りとっている。表面は凹凸が激しく、荒々しいタッチである。7の表面は、ていねいに調整している。8、9はC2—m区およびC2区第4号井戸から出土した溝状土錘で、長さ5cm前後、溝幅1cm弱あり暗かっ色を呈し、へらでみがかれている。10、11はC2区第4号井戸からの出土で、従来からよくみられた一般的なものである。



第22図 石製品・土製品実測図

円形土板（第22図12） C 2—b区の土壤から出土したもので、直径3.5cm、厚さ1～1.2mmをはかる。表面には葉脈状の压痕がある。周囲は一部磨滅しており用途は不明である。
（金井 亀喜）

c 下歎・木製品類（図版14・15a）

今回の調査で出土した木製品には下歎、砧、しゃもじ、曲物、とめぐし、櫛等がある。

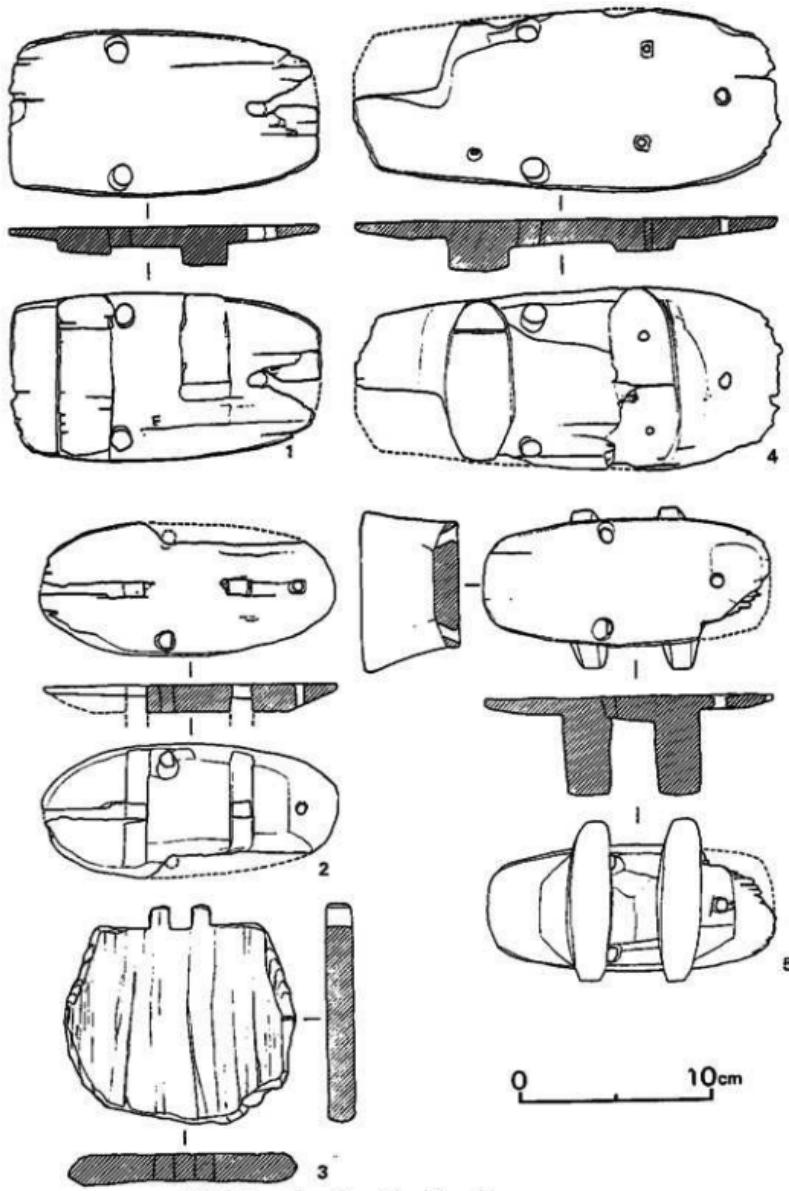
下歎（第23図） 下歎は5足分出土しており、その構造から a) 台部と歯部を一本で作った連歎下歎 b) 別材で作って組みあわせた差歎下歎に分けることができる。

連歎下歎はいずれもC 1区第10号井戸から出土したもので台の平面形は隅を丸く削った長方形をなしている。大きさは台のたけ7寸（約21cm）をこえる大型のもの（4）と5寸（約15cm）内外の小型のもの（1、5）に、また形態的には歯の高い高下歎（5）と歯の低い駒下歎風のもの（1、4）に分けることができる。歯は高下歎の場合台下部から底に向って開いた銀杏歯をしており、

断面は梢円形に近く整形している。駒下駄風のものは単に鋸で切りおとしただけの断面長方形のもの（1）とそれをさらに刃物で整形した梢円形のもの（4）とがある。台の裏面は、歯がついているため一般的に平らにはなっていないが、前後は歩き易くするため薄くしているし、両側も差歎下駄にみられるように斜めに削りおとしている。鼻緒孔は、前緒孔が小さく垂直に、横緒孔は大きく内傾に向って斜めに穿たれているのが一般的で、穿孔にあたっては焼火箸を用いた痕が歴然としているもの（1）もみられる。製作にあたっては素材の木真を台上面に、木表を歯にして整形しており、高下駄の場合一たん鋸で歯を切り出した後さらにノミ状の工具で整形したあとがみられる。

差歎下駄はC1区第8号井戸より台が、C2区第2号井戸より歯がそれぞれ一つづつ出土している。台2は平面長円形をなし連歎下駄に比べやや厚手である。台の裏面には歯をはめる幅1.1cm、深0.7~0.9cmの凹みが二本あり、各々その中央には0.9×0.7cm、1.1×0.8cmのはぞ穴がある。いずれも台部上面まで貫通しており露卯下駄と呼ばれるものである。鼻緒孔は連歎下駄と同じく前緒孔は小さく垂直に、横緒孔は大きく内傾してそれぞれ穿たれている。歯3は全長11.3cm、最大幅13.0cmを計る大型のもので上部に台のはぞ穴に入れる突起を2つもっている。歯下半はかなり磨滅していることから、この歯も本来は下に広がる銀杏歯をしていたのかもしれない。

以上のように今回の調査では連歎下駄3、差歎下駄の露卯のもの2の計5足分をあきらかにすることができた。これらを草戸千軒町遺跡から従来出土しているものと比較すると、差歎下駄4に対して連歎下駄6が出土しており、それらはほぼ同数とみてよい。大きさでは台のたけ7寸以上の大型のものと5寸内外の小型のものに分類することができ、これを現在のものと比較すると（男物7寸7分、女物7寸4分）大型のものはほぼ現在のものと同じ大きさであり、大きさにおいては往時とほとんど差異のないことがわかり、これらをまとめて大人用とするなら、小型のものは子供用と考えることができる。それは大型のもの7に対して小型のもの3という出土比率からも十分に推定される。種類で



第23圖 下 牧 実 測 図

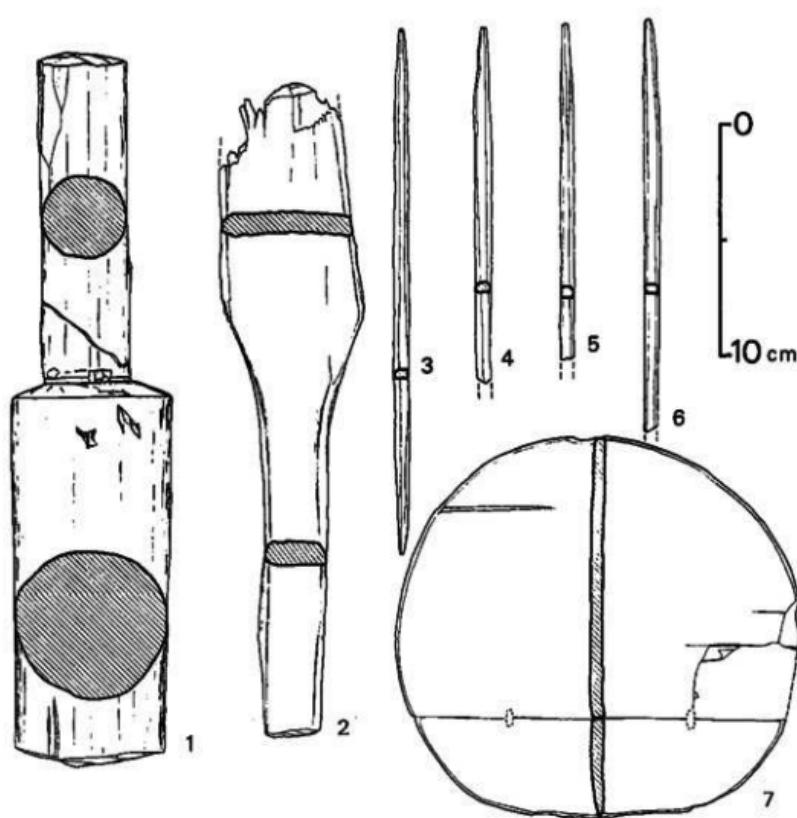
第1表 草戸千軒町遺跡出土下駄一覧表 <（）は推定>

年度	出土地	構造	台部 (単位cm)			歯部 (単位cm)				実測図 番号
			長さ	幅	厚さ	前幅	高さ	後幅	高さ	
71	C1区第10号井戸	連歯	15.0	6.6	1.2	2.2	4.0	2.5	4.0	第23図1
ク	ク	ク	16.2	8.8	1.0	2.5	1.1	3.0	0.4	ク 5
ク	ク	ク	22.1	9.4	1.2	3.3	0.5	3.3	1.2	ク 4
ク	C1区第8号井戸	差歯露卯	15.5(7.0)	1.5(1.0)			(1.0)			ク 2
ク	C2区第2号井戸	ク				(1.2)(10.5)				ク 3
61.62		連歯	21.0	8.5	0.2					
ク		ク	23.5	11.0	4.5	歯とも				
68		差歯(露卯)	25.5(8.5)	2.9(1.5)						
69	D1区第1号井戸	ク ク	22.0	9.7	3.0	1.3	10.5	1.1		
ク		連歯	22.5	10.5	10.0	2.5		2.5	2.0	

は差歯下駄の場合あきらかなものではすべて高下駄であるのに対し、連歯下駄では一つの子供用下駄を除くと高さはいずれも2cm以下となっており、使用により磨滅したとしてもそれは高下駄とは考え難い。このことは差歯下駄と連歯下駄の編年の差異があきらかでない現在、それらは用途によって種類を変え、さらに構造まで変えたとするほうが理解しやすい。

佔（第24図1） C1区第10号井戸から出土したもので長さ30.4cmの一木造りである。主体部は長さ16.2cm、径約6.5cmの円筒形をなしているが先端に向ってやや細くなっている、また断面が正円ではなく部分的に凹みがあることから丸太の表皮をとったものをそのまま利用したものらしい。把部は長さ14.2cm、径3.7cmの円筒形をなし、主体部の丸太を細く削ってつくっている。整形にあたっては鋸を使用したものらしく部分的には鋸の痕が残っている。

しゃもじ（第24図2） C1区第8.9号井戸掘り方から出土したもので、長



第24図 木製品実測図

さ28cm以上、厚さ1cmを計る。幅は把部端から約20cmのところが最も広く5.6cmあり、それから先端部へはだんだんと狭くなっている。把は2.7~3.0cm幅に両側から削っている。

曲物（第24図7）C1区第8、9、10、B1区第1の各井戸から曲物やその底が各少量ずつ出土しているが、破損が甚しく原形をあきらかにできるものは少ない。7はC1区第8号井戸から出土した曲物の底で径16.0cm、厚さ0.5

cmの円形をなし、2枚の板を楔でとめて固定している。

とめぐし（第24図3～6） 屋根を葺くときに使われたと思われるとめぐしで、C2区第3号、C1区第8号、C1区第10号の各井戸で計20数本が発見されている。原形をとどめているものは3の一本しかないが、それは長さ23cm、厚さ0.6cmで断面5角形をなし両端を尖らせている。その他のものも大きさ、形態ともにほぼ同じらしく、断面は5～6角形にけずっており、スギを用いたものが多い。

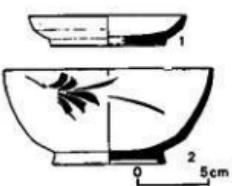
櫛（図版15a） C1区第10号井戸から出土したもので、幅11cm、長さ4.5cmの平櫛である。断面は頂部を丸くした逆三角形で最も厚い部分で厚さ1.0cmを計る。歯は両端を各幅0.2cm、頂部に0.4cmを残して両側から切られており、頭部断面はV字状をなしている。ツゲ製であろう。

この他C1区第10号井戸からは径6.0mmの丸太の両側をナタ状のもので幅6.0cmに切りおとしボール状にした木玉が出土しているが、何に使用されたものかはあきらかではない。

漆器（第25図）

漆器はC2区第1号、C2区第3号、C1区第7号、C1区第10号の各井戸から破片として出土している。そのほとんどは黒漆地に朱漆で植物の葉を描いたもので、器形には皿、椀がみられる。1はC2区第3号井戸から出土したもので径6.0mm、高さ2.2cmの木製皿で、内外面ともに黒漆が塗られているが、そ

れらは薄く木地を出している部分が多い。2はC2区第1号井戸の掘り方から出土したもので、径14.8cm、高さ6.8cmの木製椀である。外面は全面にわたり黒漆が塗られその上に朱漆で植物の葉を描き、内面は全面に朱漆が塗られている。



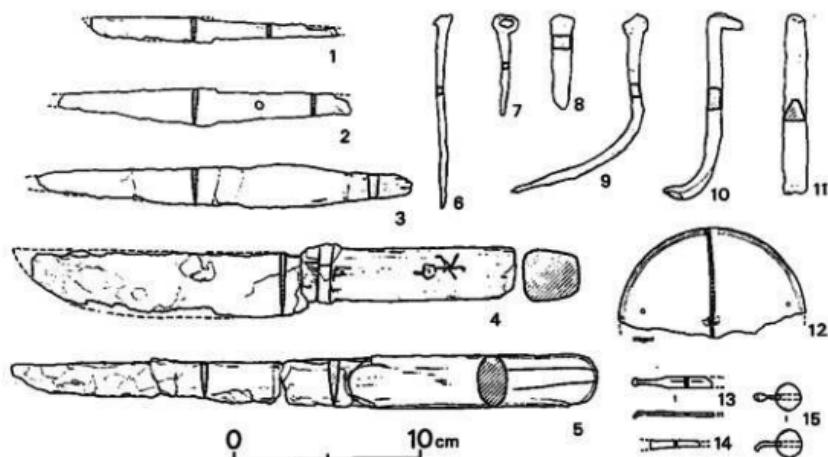
第25図 漆器実測図

（小都 隆）

d 鉄製品・銅製品・その他の遺物（図版15b）

本年度の調査では刀子・小柄・包丁・楔・釘などが出土した。

刀子（第26図2・3・5）5はB1区第2号井戸から出土し、現長31.4cm、身の長さ19.3cm、棟まちから2cmのところで身幅2.6cm、棟の厚さ0.6cm、そりはなく平造りである。柄は2枚の木片で茎をはさみ、全体を断面長円形に調整し目釘によって止めたもので、長さ13.6cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm。目釘穴は棟まちから3.7cmのところに1か所あり、径0.2cmで目釘が残存している。また、柄はまちから約1.5cm身の部分を被って、はばきの役目をなしている。3はC2-h区埋葬土壤に副葬されていたもので切先は欠けている。現長20.1cm、鍔のため身と柄の境は明確でないが、身の長さは12cm前後であろう。身の先端から8.5cmのところで身幅2.0cm、棟の厚さ0.3cmを計る。茎部には柄の一部と思われる木片が残存している。2はC1-w区表土より出土し、現長15.5cm、身の長さ8.4cm、身幅は棟まちから1cmのところで1.9cm、棟の厚さ0.3cmを計る。茎部は長さ7.1cm、棟まちから3.5cmのところで幅1.2cm、厚さ0.3cmを計る。目



第26図 鉄製品・銅製品・骨製品実測図

釘穴は棟まちから2.3cmに1か所あり、径は0.4cmである。

他に、刀子は10本以上出土したが、いずれも断片で原形はあきらかでない。

小柄（第26図1） C 1—w区表土より出土したもので、現長13.2cm、身の長さ6.5cm、まちから1cmのところで身幅1.3cm、棟の厚さ0.3cmを計り、茎は中央部で幅0.8cm、厚さ0.2cmであるが長さは不明、目釘穴は見られない。身の長さに対して茎が長いので小柄であろう。

包丁（第26図4） C 2区第4号井戸より出土し、現長25.8cm、身の長さ14.4cm、まちから1cmのところで身幅3.4cmを計り、棟の厚さ0.4cmである。柄は長さ11.3cm、幅2.8cm、厚さ1.5cmの木製で茎が差し込まれ、まちから1.5cmのところで帯状に幅0.4cm、厚さ0.2cmの鉄を巻いて締めている。柄には「泉」という字が彫り込まれている。

楔（第26図8） B 1—j区黄褐色土層上面より出土し、長さ5.0cm、頭部は幅1.2cm、厚さ0.8cmで打痕がある。頭から先端へだいに細くなっている。

釘（第26図6、7、9、10） 20本以上出土したが、頭の形でa：端を折り返して頭にしたもの（6、9）b：直角に曲げたもの（10）c：環頭にしたもの（7）の三種類に分けられる。ほとんどがaでありb、cはそれぞれ1点出土している。

その他、C 2区第2号井戸掘り方より出土し、長さ9.6cm、断面三角形の棒状鉄製品（10）がある。

懸仏（第26図12） C 1区第10号井戸から出土したもので銅製である。光背の径約10cm、周縁部は断面台形をなしている。中央部には穴のあいた「紐」状のものがあり、縁近くに径1.5mmと2.2mmの2つの穴がほぼ対称にあけられている。裏面には銘などは見られない。

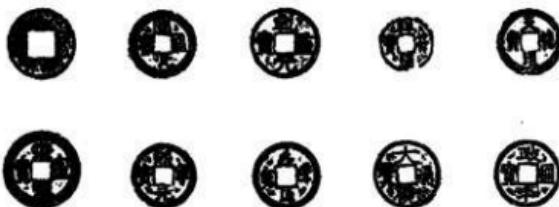
かんざし（第26図13、14、15） 13、14はC 2—m区第3号ピットより出土骨製し、である。13は現長4.3cmで耳かきをもち、表面に溝がある。14は現長3.2cmであるが実長は不明である。15はC 1—k区表土から出土したものである。玉飾りは径1.4cmの球形をなし、中央に径0.3cmの貫通した穴がある。穴の

一方には長さ1.2cmの耳かきが差し込まれ、さらに反対側には柄の一部が残存している。

(篠原 芳秀)

e 古 錢

本年度の調査地域から出土した古銭は、総計17種45枚である。その内訳は、判読不明の古銭を除いて宋錢が13種25枚と大部分を占め、他は、五株銭1枚、唐銭（開通元宝・乾元重宝）4枚、日本銭（寛永通宝）4枚である。出土地点



第27図 古 錢 拓 影

は、遺構の残存状態が比較的良好的な地域の全般にわたり、まとまって見られたのはC2-m区溝から10枚、C2-m区第3号ピットから4枚、C2-n区第3号ピットから3枚である。ただ、寛永通宝はすべて遺構面の上層である粗粒砂層の最下部において見られた。

第2表は本年度出土した古銭の内訳である。

なお、ほかに私鑄銭1枚がC2区第1号井戸より出土している。

(篠原 芳秀)

第2表 古 錢 一 覧 表

古 錢 名	初 鑄 年	(西暦)	枚 数
五 銖	前漢 元狩五年	(前 118)	1
開通元寶 <small>(開元通寶)</small>	唐 武德四年	(14)	3
乾元重寶	唐 乾元二年	(759)	1
景德元寶	北宋 景德元年	(1004)	1
祥符元寶	北宋 大中祥符元年	(1008)	1
祥符通寶	北宋 大中祥符元年	(1008)	1
天禧通寶	北宋 天禧年間	(1017~ 1022)	1
天聖元寶	北宋 天聖元年	(1023)	1
皇宋通寶	北宋 宝元二年	(1039)	1
熙寧元寶	北宋 熙寧元年	(1068)	6
熙寧重寶	北宋 熙寧年間	(1068~ 1077)	1
元豐通寶	北宋 元豐元年	(1078)	5
紹聖元寶	北宋 紹聖元年	(1094)	1
元符通寶	北宋 元符元年	(1098)	1
大觀通寶	北宋 大觀元年	(1107)	1
政和通寶	北宋 政和元年	(1111)	4
寛永通寶	江戸 寛永年間	(1624~ 1644)	4
合 計			34

IV 総 括

今年度の調査対象地域は、遺跡の北限と考えられる遺跡包蔵大中洲北端部分の内、東側流水ぞいの約 1,400m² である。

この地域は、1969年（昭和44年）度調査区とは東側の流水路をへだてわずか 20m のところにあり、また1965年（昭和40年）度調査地域の北西端に近接している。過去の両調査区ともほとんど流失して旧来の姿をとどめない。今年度の調査区も、日々流水に削り取られつつあり、緊急に調査を要する地域であった。

中洲の北端部は、今回の調査区も含めて、すでに遺構の一部が流失していることを懸念していたが、実際に表土を除去し、遺構相当面である暗かっ色粘土層を露出してみると、調査区南半の C 2 区では、敷石、柱穴、土壙、溝などの遺構が比較的良好に残存しており、北半の C 1 区では、過去の出水による遺構面の流失が観察され、疎を含んだうすい黒灰かっ色土が部分的な広がりをみせるのと、粘土層深く掘り込んだ井戸や土壙の掘り方が残存するのみであった。調査は次年度にくり越したが、A 1 、 B 1 、 C 1 区について、東西に表土を除去したところ、ほぼ同様の結果が得られた。

のことから、中洲北半における遺構の状態は、潜流橋から 200m までがかなり良好に残存しており、200m 以北は一部流失し、枝状に遺構相当面が残存しているものと推定される。もちろん井戸などのように粘土層深く掘りこんだものはよく残っている。

C 2 区における遺構面は、部分的に 2 ~ 3 時期に分れるようである。特に調査区南端では、角礫を敷き、たたきしめたようなかたい面、その下にある 2 段の溝状遺構と 3 時期に分れる。またこの北側では、南から続く敷石が途切れて部分的に残存し、この下に柱穴、土壙などの遺構がみられるので 2 時期に分れる。しかし、これらの遺構の時期的な差については出土遺物からみて、いずれ

も鎌倉期を大きくはずれることはなく、時間的にそれほどのへだたりはないようである。

C 2 区では暗かっ色粘土層のレベルは標高190~200cmで、1965年度調査地域のレベルとほぼ同じであり、C 1 区ではこれより約30cmさがって標高160cm前後となる。

したがって今回の調査区では、室町期以後の遺構は、井戸や埋葬土壌などを除いてすでに過去の流失などによって存在しなかったとしてよい。ただ、室町期の遺構面について現在までの調査では、その内容がそれ程あきらかにされておらず遺跡の規模が鎌倉期のものよりいちじるしく縮少されたものと予想した脱もあったが、同時期の井戸の分布からみて、本来は、かなりの広がりをもって存在していたことが推定されるにいたった。

C 1-w 区からは、平安時代に比定される須恵器、壺、壺および土師器甕、鉢が1か所からまとまって出土したが、遺構面との関連をもってとらえることはできなかった。この地域は南側の鎌倉期と考える遺構面が流水に洗われて一段低くなった状態にあり、さらに古い時期の遺構面を期待したが、層位的に見てかっ色粘土層が間断なく続き生活面として把握しえなかった。ただ遺物の出土状態がこの粘土に半ば埋没してはりついた状態で発見され、流水によって運ばれてきたとは思えない。

本遺跡における平安時代の遺物は過去6回の調査でも、綠釉陶器や須恵質の陶器などたびたび散見されたが、適確に遺構面と関連するものはなかった。したがって従来いわれてきたように、本遺跡の生活の舞台が鎌倉期以降にあると考えるのが穏当であろうが、今年度の遺物の出土状態などからして、なお検討の余地を残している。

建築址遺構は柱穴と礎石を中心としたものであるが、今回の調査区では礎石は比較的少なく、しかも1968年（昭和43年）度調査の5区、6区で観察されているように、やはりここでも柱穴の方がやや古い様相を示している。柱穴は、底に根石を敷いているものとそうでないものとがあり、後者の方がずっと多

い。また、数次の建替えがあったとみて柱穴間の様相はかなり複雑であり、調査区の制限もあるため建物の規模や棟のならびなどはあきらかにしがたい。ただし、調査区南端の溝状遺構の西側では、これをとりまくような形で東西に柱穴がならんでおり、溝の北側の建築址も、ほぼこれと同様に東西を軸とするものが一部考えられる。このことは1965年度調査のF区道路遺構が、調査区の東縁を南北にはしってることと考え合せるとつじつまがあう。しかし、いずれにせよ今回の柱穴遺構は、1965年度調査の建築址遺構のようなまとまりをみせていないので即断はさるべきであろう。

土壙は、今回の調査で2～3種類に類別された。1つは深さ15～20cmの長円形ないしは隅丸方形のプランをもち、土師質小皿、塊、土鍋などを中心とする遺物が出土するものと今一つは直径1m前後でほぼ円形のプランをなし、深さが65～90cmと粘土層深く掘り込んだものである。

これらの土壙の性格については現在のところあきらかにしがたいが、前者については、日常生活什器類を中心とする遺物が出土することから、住居内のそれに関連する遺構、例えば台所の一部とも考えられよう。後者については底に曲物をすえたものや、有機質土が充満し遺物は掘り込みの上面にのみ残っているものなど、さらにその性格が異なるものようである。特にC2-m区第3号ピットは、上部に30cm前後の疊をつめてしっかりととかためており、内部からかんざしが出土しているところから墓壙的性格がつよい。

井戸は、11基の調査をおこなった。このうちわけは、方形プランの木組井戸8基、桶状の円筒を井筒としたもの1基、11枚のたて板を模でつないだ11角形の井戸1基、曲物井戸1基である。

やはり数の上では、方形プランの木組井戸が多く、一般的といえよう。このうち、C2区第2号井戸とC1区第8号井戸は、構造上従来のものよりやや異っている。前者は、3重のたて板で囲ったもので、その一番外側のたて板に取りつけた横桟の上に、次の内側のたて板がのり、同様に、中のたて板に取りつけた横桟の上に、さらに一番内側のたて板をのせるといった構造で、中筒下底

部の内外にぎっしりと礎をつめている。後者は、四隅に角柱を立て、その外側から厚いよこ板を積み上げて井筒としたものであり、1969年度調査のD1区井戸に類似している。しかし、D1区井戸の場合には、たて板の井筒の中によこ板を積んでおり、その内側には支柱も棟ももたない。いずれにしても、堅牢、入念な造作であり、C2区第2号井戸、C1区第8号井戸とも室町期のものと推定されるところから、井戸構築技術の進歩がうかがわれる。

C2区第1号井戸は、桶状の円筒を2段に重ねて井筒としたもので、すでにC6区第1号井戸、D2区第4号井戸などの調査例があるが、今回のものは、板材の連結に楔を使用せず、竹製のたがで締めているだけである。また、上段の周囲には、井桁を設置したと思われる六角形の板敷が発見されており、この種の円筒形井戸の構造が、ほぼあきらかになってきた。

11角形のC2区第4号井戸は、1969年調査のD2区第2号井戸や、1970年調査のA0区第1号井戸の下部構造に類似する、多面体プランを有するものである。A0区第1号井戸は上部構造が全く異なるが、今回のものは、上部構造も11角形の多面体をなしている。

この種の井戸に共通してみられるることは、井筒を構成するたて板に厚さ5cm前後の大型のものを使用し、これを大きな楔で連結していることで、きわめて堅牢緻密に作られている。また、たて板の下端部附近に、4~6cmの穴または溝を穿ったものが多い。これは、井戸構築時に井筒を地で組立て、掘り方内におろすための繩掛けまたは手掛け的な役割りを果すことも考えられるが、今回のものは、上部構造にもこれがあり、今後の検討を要する。いずれにしてもこれら多面体の井戸には、同時代的共通性をみるとできよう。

なお、本遺跡においては初例であるが、この井戸の中央には、節を抜いた径7.5cmの竹が立ててあり、井筒底部の石敷近くに達していた。藤井昭氏（広島県教育委員会）の教示によれば、県内各地で現在でも、井戸の廃絶に際して、竹づつなどを立て水神の出入りを助けるという水神信仰にともなう習俗があり、本例もそれに該当するのではないかということであった。事実、水神信仰

は、古くから人々の心に根ざすものであり、本例がこれに該当するとすれば県内最古の事例であるといえよう。またこの竹をもって、井戸廃絶に際してのガス抜きとする例が、遺跡附近の農村地帯に現在でもあるが、むしろこれは、当初の水神信仰本来の意味が忘れられ変容していった、比較的新しい習俗といえるのではあるまいか。ただ、この習俗については、この井戸が人為的というよりむしろ洪水による自然的廃絶を余儀なくされた可能性が強いことと、C1区第8号井戸のようにあきらかに人為的に廃絶された井戸にこのような例がないこと、などの否定的な事実もあることからみて、今後の調査例をまって検討されるべきであろう。

井戸の機能は、その水質の良否、湧水量の多少によって変ってくると思われるが、井筒下端部の海拔高度は、大部分が30~40cm附近にあり、同位の伏流水下水を利用している。なかには例外的に、C1区第9号井戸、B1区第2号井戸のように、井筒の下端が地下水層にまで達せず、青色粘土中にとどまっているものもある。しかしこの場合でも、下底は湧水砂層まで掘られている。ただ、これらの井戸は、湧水量の変化による影響を、もっとも受けやすい構造をもつものと思われ、短期間の使用にしか耐えられなかったものと推定される。特にC1区第9号井戸の場合には、井戸の掘り方自体もきわめて狹隘で、当初より長期間にわたる使用を目的としなかったか、水質の良否を問題としなかった例のようである。

ここでもう一つ注目すべきは、同位湧水層に設置した井筒の下底部浄化装置の違いであろう。水質の良否を問題としない場合は別として、良質の水を求める場合に、大きく二種類の施設がなされているのは、これまでたびたび指摘されてきた。すなわち、井筒下底に曲物ないしは曲物に類するものを設置する場合と、角礫や円礫などを敷きつめる場合とである。両者のつかいわけの意図が何處にあるのか、なおあきらかでない面が多いが、今年度の調査で、掘り方の重複するC2区第2号井戸が第3号井戸よりも新しく、作り替えとみられた第2号井戸は石を敷き 第3号井戸は曲物を設置しているところから、敷石の方

が、曲物をするよりも新しい形態と考えることも出来るのではなかろうか。ただ、現在までの調査で室町期のものにも曲物が設置されているケースがあるし、鎌倉期の場合にも石敷のケースがある。しかし、総じて室町期のものには石敷が多く、鎌倉期の場合には曲物が多いようで、曲物から石敷への漸進的消長を考えることもできよう。いずれにしても、今までのところ、井戸の時期については、非常に大まかな分類しかできないが、さらに調査例の増加をまって、詳細な検討をくわえることが必要であろう。

今回の調査区における出土遺物は、土師質土器（小皿、塊、鍋）などの日常生活什器の類が圧倒的に多く、個体数にして数百点に達した。陶器のなかではすり鉢が多い。遺物は調査区南端のC2区溝状遺構や土壙からの出土が中心となっており、中国系の磁器類は少なく、この地域の性格をものがたっているようである。

井戸内からは、陶磁器、土師質土器、瓦質土器、土製品、石製品、漆器、鉄製品、植物種子類、獸骨など相変らず広範囲にわたる生活に密着した遺物が出土した。

以上のように、本年度の調査地域はC1区とC2区で遺構の残存状態が大きく異なり、遺跡北端における遺構の実態を詳細に把握した。したがって遺跡包蔵大中洲における今後の調査をすすめていく上にも、具体的な足がかりをつかむことができたといえよう。

（金井 龜喜）

付 発 挖 調 査 日 誌 抄

7月20日(火) 晴

現場にて午後2時より歓迎式を行なう。

県教委社会教育課長、福山市助役、福山市教委社会教育課長等の出席をうける。その後、本年度の発掘調査について打ち合せを行なう。

7月21日(水) 晴

昨日の打ち合せにより、本年度調査地域は、本中洲北端部と決定した。本中洲北端部から南北に10m間隔で2m×2mの試掘場を5か所設ける。東西は先端から20mのところで同様に10m間隔の試掘場を6か所設けた。

7月22日(木) 晴

昨日の試掘により最北端部の遺構の残存状態が思わしくないのでこの地域を防潮堤として残しておくことにし、この南に東西に長さ80m、幅20mの調査区を設定し、これに接して東側の流水敷ぞいでは幅15m、長さ70mの調査区を南北に設定した。調査区南端より堆土にかかる。

7月23日(金) 晴

昨日に続き堆土を行なう。

7月24日(土) 晴

グリッドの境界杭を打つ。原点より西50mと150mの地点より北へ50mごとにおとす。

8月2日(月) 晴

集中豪雨により作業を中断していたが、本日より開始する。

グリッドの境界杭を打つ。原点より西100mの線を基準に北側の方へ150mまで打つ。

8月3日(火) 晴

グリッドの境界杭を打つ。原点より西100m線を北側の方へ250mまで打つ。

8月4日(水) 畏時々雨

終日調査区の堆土作業を続ける。

8月6日(金) 晴

建設者の協力によりブルドーザーとパワーシャベルで遺構上面約30cmまでの土砂の堆土を行なう。その後、調査区南側(C2-1・m・n区)より北に向けて遺構面の露出に努める。

8月7日(土) 晴

遺構面はC2-1・m・n区では東側の流水路に近い方は低くなっているようである。また1区西南隅に杭列が東西に走っているのが明らかとなる。遺物が遺構上面の荒い砂の中に少量、点々とみいだされ始める。

8月9日(月) 晴

C2-1・m・n区一遺構面の露出に努める。柱穴や土壙が出現する。

8月10日(火) 晴

C2-1区の杭列の北側に溝が東西に走っているのが明らかとなり、その溝付近には疊の分布しているところがみられる。またその溝の北西半部には柱穴がみられ、建築址が予想された。

C2-g・h区で土壙や柱穴、石積遺構が明らかとなり始める。

C2-m区第1号ピットもともと円形のピットであるが半分削られており、暗かっ色の土が点々と混入した中に土鍋1個体分が落ち込んでいた。

C2-m区第2号ピット一円形のピットで土質の皿が10個体分ぐらいみられる。

8月11日(水) 晴

C2-c区第1号ピット一楕円形のピットで土器質土器、木炭、鉄器、すり鉢などが落ち込んでいる。写真撮影をおこなう。

C2-b・c・g・h・l・m・m区の土壙、石積、柱穴遺構の清掃を行なう。またg区では東

西に走る溝が明らかとなった。

C 2 区第 2 号、第 3 号井戸一上部の石積、暗かっ色の掘り込みが西壁に半分かかったような形で明らかにされる。

8月12日（木）曇時々雨

C 2-c 区第 1 号ピット一実測をおこない遺物をとり上げる。g 区では溝を清掃中溝の端で柱穴が明らかとなる。

C 2-m 区第 1 号、C 2-m 区第 2 号ピット一写真撮影・実測の後、遺物をとり上げる。

C 2-m 区第 3 号ピット一上部に 20~30cm 大の石を置いた円形のピットで清掃して写真撮影をする。

C 1-u 区拂土を行なう。

8月13日（金）晴

C 2-m 区第 2 号ピット一断面図をとるために南側半分を掘る。底まで約 1m ある。

C 2 区の平板測量を行なう。（縮尺 1:100）

8月17日（火）晴

C 1-v-w 区一拂土を行なう。

C 2-h 区第 1 土壙一土師質土器のつまっている楕円形のピットで古鉄 1 が発見される。

C 2-1 区の北西端に 1 個体分の四ツ足の小動物の骨を発見する。

C 2-m 区にみられる板石の広がりを明らかにするためにいっぽいに調査区を拡張する。

C 2-m 区第 2 号ピット一底まで掘りあげる。約 1m の深さを持ち、底は円形を成す。

8月18日（水）晴

C 1-v-w 区一拂土を続ける。両区の中ほどで南側よりも北側の造構面が約 30cm ばかり低くなっていることが明らかになった。

C 2-h 区第 1 土壙一接いて掘る。C 2-1 区の歯骨を掘り上げて実測をおこなう。

C 2-m 区第 3 号ピット一上部の石を実測し下部を掘る。石は穴をふさぐように上部にのみ置か

れており、下部からは土鍋、かんざしが出土した。

C 2-n 区では m 区にみられたような深 70~100cm の大形の土壙が発見された。

8月19日（木）曇

C 2-m-n 区の境界近くより新たに土壙がみつかる。

C 2-m 区第 3 号ピット一底まで掘り下げる。底は 2 層になっている。実測を完了した。

C 2-h 区第 1 号ピット一滑特、少真隠影の後実測を開始する。

C 1-v-w 区一拂土を行なう。

8月20日（金）曇

C 2 区第 1 号井戸一発掘区に掘り込みの半分しか現われていなかったため発掘区を東側に拡張する。掘り込みは楕円形を呈し上部の黒色土を約 25cm 取り除き約 10cm の青灰色粘土を掘ると、西寄りに井戸の上部構造と思われる六角形プランをなす板があらわれた。

C 2-h 区第 1 号ピット一実測を続ける。

C 2-g 区埋葬土壙一当初単純なピットと思っていたところ内部から人頭骨が出土し調査区西壁にのびていたので拡張して掘る。長さ約 1.5m の楕円形の掘り込みに、北東に頭を向けた倒臥屈葬の状態をしている。肋骨、脊椎などは保存状態が悪く、ほとんど残っていない。

C 2 区第 4 号井戸一東壁寄りに掘り方が明らかとなる。

C 区南端で東西にのびる溝が明らかとなる。

C 2 区第 2 号、3 号井戸一上部の石積のある暗青かっ色土が西に広がっているので拡張して範囲を明らかにする。

8月21日（土）晴

C 2-g 区埋葬土壙一写真撮影をする。

C 2-h 区第 1 号ピット一実測の後遺物を取り上げる。

C 2 区第1号井戸—掘り方より、とめぐしが発見された。

C 2 区第2号、3号井戸—西に拡張してその範囲を明らかにしたのち内部の石を鋤出して清掃する。

C 2—l・m・n区を清掃の後、写真撮影を行なう。

C 2 区第4号井戸—掘り方を追って東に拡張し内部を掘り始める。

C 1—v・w区—排土を行なう。

8月23日（月）小雨

昨日の大雨で堤が切れ、発掘区全域にわたり冠水したので、排水並びに堤の補修にかかった。

8月24日（火）晴

昨日に続き排水を行なう。

C 1—v・w区の排土を続ける。

8月25日（水）晴

C 2—l・m・n区を清掃の後、造り方を設定する。

C 2—b・c・g・h区は表面の清掃を行なう。n区南側に新しくビットが発見された。

C 1—v・w・q・r区—排土を行なう。

8月26日（木）晴

C 2—l・m・n区—実測を開始する。（縮尺1/10）

C 2 区第1号井戸—清掃の後写真撮影をおこなう。

8月27日（金）晴

C 2—l・m・n区東半部の実測を完了した。m・n区南側でつながっている敷石は、上部の石を取り除くと20~30cm大の敷石遺構が発見された。

C 2 区第4号井戸—掘り下げる。

C 1—q・r・l区の排土を行なう。

8月28日（土）晴

C 2—l・m・n区—実測を完了する。

C 2—b・c・g・h・l区—清掃後写真撮影をする。

C 2—g区埋葬土壙一人骨の実測をする。

b・c・g・h・i区—すべてのビット、土壙を平板測量する。

C 2 区第4号井戸—僅約3mの大形の掘り込みだが上部は非常に固い。

C 2—c区第3号ビット—僅約60cmの円形プランを呈し、土師質の塊が中から発見された。内部には炭が多くみられる。

C 1—q・r・l区—排土を行なう。

8月30日（月）雨

台風23号による雨のため屋内作業を行なう。

8月31日（火）晴

昨日の台風の為、調査区に水が入ったので排水をする。

C 1—q・r・l区—排土を続ける。

9月1日（水）曇

C 2—b・c・g・h・i区—清掃ならびに造り方を設定する。

C 2 区第1号井戸—実測にかかったが、2度の冠水でたて板の半分は流れてしまった。

C 2 区第2号、3号井戸—上部の石積の実測を開始する。

C 2 区第4号井戸—掘り方の実測を行なう。

C 1—g・l区—排土を行なう。

9月2日（木）晴

C 2—b・c・g・h・i区—造り方を設定する。

C 2—g区埋葬土壙一人骨をとりあげる。

C 1—w区に土器のかたまっているところが発見された。壺や塊などが遺構上面にそのままの状態でかたまつておらず清掃、写真撮影、実測の後とりあげた。須恵器などが出土している。

C 2 区第1号井戸—南半を掘り下げ、下部の状況をみる。たて板の下にたがでしめられた桶状の円筒が発見された。

9月3日（金）晴

C2区第1号井戸一円筒形井戸を掘り下げ平面の写真撮影、断面実測の後とりあげる。

直徑約65cm、高さ約70cmの井戸は50枚の板からなり、たがでしめられている。遺物として特に完全形の漆塗の木製椀が出土している。

C2-1・m・n区溝、敷石造構一小跡を取り除くと、巾約1~2m、深さ約20~30cmの溝状造構が明らかとなり、南東部では敷石造構が明らかになる。遺物は土師質土器の塊が多く、古鏡が数枚出土した。

C2-b・c・g・h・i区一実測を行なう。

9月4日（土）晴

C2-b・c・g・h・i区一実測を終え、平板測量を行なう。

C1-4区に石群が明らかとなり、東よりN1、2、3と名付け実測を行なう。

C1-1区の東端に南北に平行に延びる二本の溝が明らかとなる。またC1-f・g区には柱穴が5か所明らかとなった。

C2-1・m・n区の溝状造構を掘り下げる。土師質土器多数出土、その他古鏡、歯骨が出土する。

9月7日（火）曇

異常水位上昇のため東壁が崩れ発掘区全面にわたり水をかぶった。堤防を補修しポンプ2台で排水する。

9月8日（水）曇

調査区の排水をし、造構面の清掃を行なう。造構の下層の状態を明らかにするため、C2-1・m・n区の北に幅2mのトレンチを東西に調査区いっぽいに設定して掘る。

9月11日（土）晴

昨日の雨で調査区が冠水したので終日排水を行なう。

9月13日（月）晴

C2区の小トレンチを掘り進む。土層は第1層かっ色砂質土、第2層暗かっ色粘質土、第3層かっ色粘土層、第4層背かっ色含砂粘質土層となつておらず、遺物は第1層と第2層の上部に若干含まれ、あとの層はほとんどみられない。

C2-1・m・n区溝状造構-m区西端あたりからU字状の溝が東に向っており、上部の敷石を取り除くとその黒色粘土の中に、土師質塊、土鍋、土釜、備前焼、常滑焼等が含まれていた。またその溝の南側に平行に柱穴と思われる径25cmぐらいのビットがみられた。またその南側の杭列は2列明らかにされ、その溝の北側にも別の小溝があった。

9月14日（火）晴

C2区小トレンチの第4層を掘り下げる。

第5層は砂層で浸水層となることが明らかになった。

C2-1・m・n区一溝状造構の掘り下げを続ける。

9月16日（木）晴

C2区第4号井戸一断面観察のため西半部のみを掘り下げる。遺物も土師質土器片、土鍋片少量含むのみではほとんどない。写真撮影の後、実測にかかった。

C2区第2号、第3号井戸一上部の石積を掘り下げる。井戸は中央部と東北端の2か所で明らかとなる。第2号井戸は一辺約70~80cmの方形井戸でとめ石、土師質土器片多数、備前焼すり鉢が出土した。

C2-1・m・n区一溝状造構の掘り下げを行ない清掃して写真撮影をする。北側のものは溝のなかに柱穴や跡がみつかる。南側のものは東端のところでは石の集積した場所があつたが、その上部の石をとり除くとその下に、直角に石を敷いた造構が現われ、さらにその下は溝となっていることが明らかとなつた。

9月18日（土）曇

C2区第2号、第3号井戸一掘り方が重複しており、第3号井戸の掘り方は小さいが、第2号の方は大きい。第3号井戸は第2号よりも古い。写真撮影の後実測を行なう。第2号井戸は下部の方形井戸の上部に2重にたて板を配して釘で打ちつけたもので堅牢なものである。第3号井戸はたて板を配した方形木組み井戸である。

9月20日（月）曇

C2-1・m・n区一溝状造構の実測のため造り方を設定する。

C2区第4号井戸一東半部を掘り進んだところ11角形の木組み井戸が明らかになった。梢円形をしており内側と外側の2枚の板が組み合わされている。内外とも上端はすり切れている。内側の板は上端が楔で止められ、外側の板も楔で締められている。井戸内部は、青味の強い褐色の砂じまいの粘質土で下にいくほど砂が多くなる。また井戸の中央部には竹が打ち込まれていた。内部出土の遺物はとめぐし、すり鉢、瀬戸焼などがある。写真撮影をして実測をする。

9月21日（火）晴

C2-1・m・n区一溝状造構の実測を行なう。m区南東部の石敷造構は、建物の基壇を思わせるものがある。

C1-k・l区一埴土にかかる。

C2区第4号井戸一実測をして掘りあげる。井戸は2枚掘りかと思われたが、外側の方が上部、内側の方が下部構造であった。井戸の底には石が積み重ねられている。また板の下端に穴が開けられている。井戸内よりは木くずが多く、遺物は完全形の燈明皿、柄に「泉」と書いた包丁、亀山焼片、とめぐし、木の実、魚の鱗、骨片などがみられた。

9月22日（水）曇

C2-1・m・n区一溝状造構の実測を完了する。

C2区第3号井戸一掘りあげる。木組み方形井戸の横桟の下に曲物をすえていた。

調査区西縁ぞいに南北に長く幅約1mの小トレンチを設定して層の状態を調べる。

9月23日（木）曇

C2区第2号井戸一取りあげた。普通のたて板を使用した方形井戸に、更にその外側に2重にたて板を配した3重構造の井戸である。井戸の底周辺には疊がしいてあった。遺物は、下駄のハマ、炭化米、桃の種、加工木片などが出ていた。

C1-u区の発掘区西壁ぞいに断面を調べるために幅1mの小トレンチを設定した。

9月24日（金）晴

C2-g区の小トレンチを掘りあげる。層位は同区の東西トレンチと同様であった。

q区の西端で石組造構が明らかとなり、古鏡、竜泉窯青磁片、土師質小皿などが出土した。

9月25日（土）晴

C1-q区石組造構一掘り広げその範囲を調べる。部分的に広がっている暗かっ色土の上に10cmの大礫が分布している。

C1-v区一小トレンチの西壁の実測を行なう。

C1-f・l区の小トレンチを掘り下げる。

9月26日（火）晴

C1-f・l区一小トレンチ西壁の実測を行なう。

C1区、C2区に連続させた小トレンチの層をみると、南北で異なっており、包含層であるかっ色土は南半のみに存し、北半はそれが掘り取られて下部の粘土層が出ていた。

表土の断面図を作成するため調査区の西壁部を清掃して実測をする。

9月29日（水）晴

C1区第7号井戸一区東壁寄りに南北に走る溝が2本明らかにされていたが、その西側に掘り方が現われた。その西半部を耕土したところ方形

の木組み井戸が現われた。横桟を2段に配している。井戸内の砂は高い位置よりみられる。掘り方

内より青磁片、漆を塗った須恵器などが出土した。

井戸の北側では柱穴が明らかとなり、柱穴の底に石のあるものとそうでないものとがある。

9月30日(木)晴

C 1区第7号井戸—断面の清掃、写真撮影、実測の後、東半部を掘る。井戸内の青色粘土中より磁石が出土する。

C 1—1区の造構部分の清掃と写真撮影を行なう。

C 1—f・k区の排土をするが、造構面は削られてかなり凹凸がみられる。遺物は土師質土器片少く、かんざしの頭1が出土する。

10月2日(土)晴

C 1区第7号井戸—実測を行なう。

B 1—j・o区の排土を行なう。

C 1—f・k区とg・l区との間に堤防を築く。

10月4日(月)晴

C 1—1区の造構部分の実測を行なう。

E区北側に灰黒かっ色の土が落ち込んだ造構が明らかとなり、内部より土師質土器片、瀬戸焼、常滑焼などが出でている。

B 1—j・o区、C 1—f・k区の排土作業中j区とf区にまたがった井戸の掘り方が明らかとなる。k区では土師質土器の入ったビットがみつかる。

C 1—k区第1号ビット—ビット内の排土、清掃、写真撮影、実測を行なう。4点の高台付の土師質塊が入っており内部は砂でおおわれていた。

C 1区第10号井戸—k区第1号ビットの北に直径約3.5mの円形の掘り方が明らかになる。中央に1辺1m足らずの方形の青灰色粘土質土が現われ、掘り方の灰黒かっ色土層より鎌倉期の常滑焼、土師質土器片が出土する。

B 1区第2号井戸—C 1—k区第1号ビットの

西側に底2m余りの円形のプランが現われ、排土したところ円形の曲物があらわされた。

C 1—s区の北側の落ち込みが西側に延びてるので広がりを明らかにする。その掘り込みは2段になり、上部の灰黒かっ色土の中に、瀬戸焼、常滑焼、土師質皿、獸骨等が出土する。その下は灰褐色の砂で遺物は含まずまた、灰黒かっ色土中には磁石の遺構がみられた。

C 1区第8号、第9号井戸—掘り方が明らかとなる。

C 1区第7号井戸—掘り上げる。横桟は3段あり、井戸底には礫が散かれていた。

10月6日(水)晴

C 1—k区第1号ビット—土器を取り除くと底はまだ深くなるようだった。

B 1区第2号井戸—写真撮影、実測をする。

C 1—1区第1号ビット—底80cmぐらいの円形のビットで、内部の砂を取り除くと曲物があらわれ、その中から岡安窯珠光青磁片、土縁が出土した。

C 1区第8号、第9号井戸—掘り方が明らかにする。中央部には石積がみられた。

C 1区第10号井戸—東半部の排土を行なう。井戸内は木片が多数みられ、竜泉窯青磁片、古鏡などが出土する。

C 1—s区の掘り込みを清掃して実測をする。

10月7日(木)晴

B 1区第10号井戸—断面を実測の後、井戸の中及び西半分の排土を行なう。井戸の中は上端より、50~60cmで青灰色粘土質土から砂に変わる。横桟を3段に配したもので、その間は四隅の角柱で支えられていた。遺物は井戸内の青色粘土から多く出土し、漆器碗片、下駄、土縁、布片、曲物、漆、とめぐしなどが出土した。

C 1—1区第1号ビット—実測を行なう。

B 1区第2号井戸—曲物をとりあげる。曲物は

2重になっており、内部より曲物片・多數、刀子などが出土する。

10月11日（月）晴

C 1 区第10号井戸—井戸内外の拂土作業を行なうとより上げる。井戸内は下部に2重張りの曲物が置かれていた。

C 1 区第8号、第9号井戸—いずれも方形木組み井戸で、掘り方が接している。南側の第8号井戸は上部に角柱が投棄されており、焼絶されたようである。その北側の第9号井戸は第8号井戸よりもやや高い位置にある。

10月12日（火）晴

C 1 区第8号、第9号井戸—上部の消掃、写真撮影を行なう。第8号井戸は上部の石を剥離して取り除き上部構造を明らかにする。たて板とよこ板を組み合わせた非常に複雑な構造である。第9号井戸を実測をする。内部には木片が多く落ちている。

10月13日（水）晴

C 1 区第8号井戸—内部の土を取り除くと上端より約30cmぐらいのところより大きな石が落ち込んでいるのが明らかとなった。

C 1 区第9号井戸—井戸の掘り方は非常に小さく、井戸内には底50cmあまりの曲物が入っている。横桟は1段しかなくその横桟の下に四隅に角柱が置かれていた。出土遺物は少なくて、土師質土器片、とめぐしなどが若干出土した。

10月15日（金）晴

C 1 区第8号井戸—井戸内の拂土を続ける。井戸の下部構造は、四隅に角柱を配し、四面とも板を横に数段重ねた構造で非常に堅牢な作りである。底には壁が敷かれていた。

B 1—j 区より柱根の残るビット、柱穴が明らかとなつたので消掃して写真撮影をする。

調査区の平板測量を行なう。

10月16日（土）晴

C 1 区第8号井戸—掘り方の拂土を行なう。また井戸内よりはとめぐし、子供用の下駄が出土している。

C 1 区第9号井戸—とり上げる。

10月18日（月）晴

C 1 区第8号井戸—とり上げた後漏水が激しいので埋め戻す。

B 1 区第1号井戸—井戸の掘り方、中央の井戸のある方形の青灰色粘質土を出し、東半部の拂土をする。

10月19日（火）晴

B 1 区第1号井戸—東半部を掘り下げ、消掃、写真撮影の後、断面の実測をして西半部も掘り進む。一辺約80cmばかりの方形の木組み井戸である。

B 1 区第3号井戸—O区を消掃中、円形の掘り込みが明らかとなる。中央より方形の木組み井戸が現われた。

本中洲東岸にみえている杭列の平板測量をする。

10月20日（水）晴

B 1 区第1号井戸—実測をしてとり上げる。井戸内は青色粘土であるが、最下段の横桟あたりから壁が敷かれていた。また底には曲物が置かれていた。

B 1 区第3号井戸—最下段の横桟の下より曲物が現われる。

10月21日（木）晴

B 1—j 区にみられる柱穴、ビットの実測を行なう。

B 1—j・o区、C 1—l・k区の全景写真を撮る。

10月22日（金）晴後暴

川中に残っている円形井戸の位置を平板測量する。また造構面、杭列のレベルを測り、本年度の調査をすべて終了した。

（中田 昭）

図版



a. 遺跡遠景(○は昭和46年度調査区)



b. 調査区近景(C2区)



a. C 2 - g · h区 柱穴遺構と人骨埋葬土壤(○)



b. C 2 - l · m区 柱穴遺構



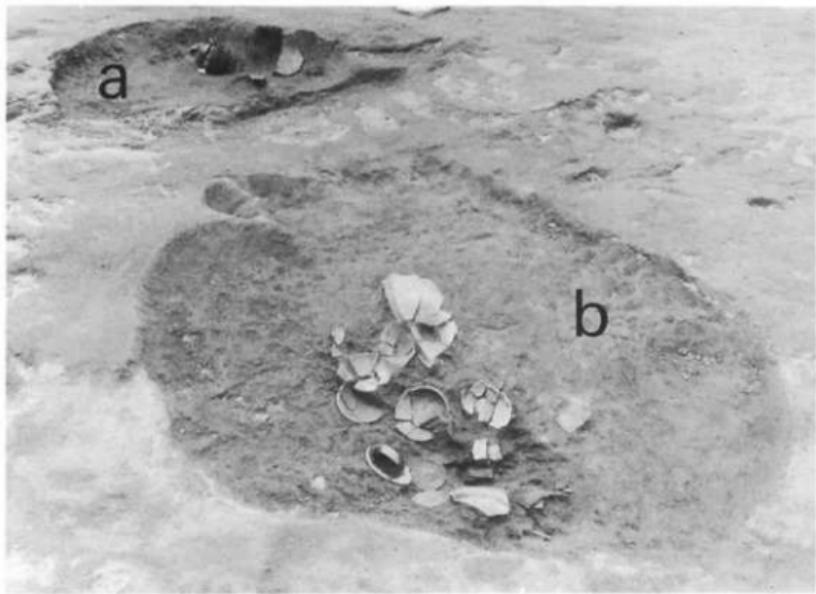
a. C1-w区 須恵器・土師器出土の状態



b. C2-g区 人骨埋葬土壙全景



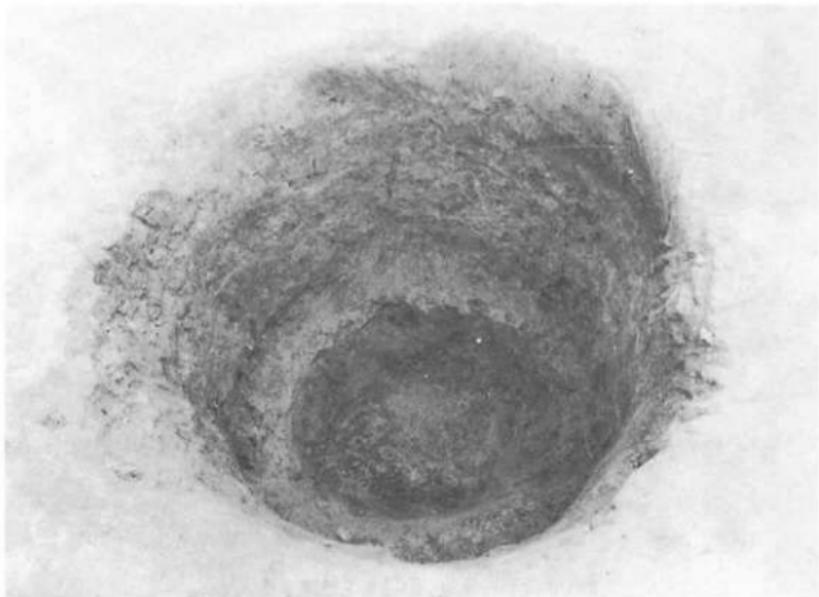
a. C 2 - b区 第1土壤



b. C 2 - m区 第1 (a)・第2 (b) 土壠



a. C 2 - m[区] 第3土壤



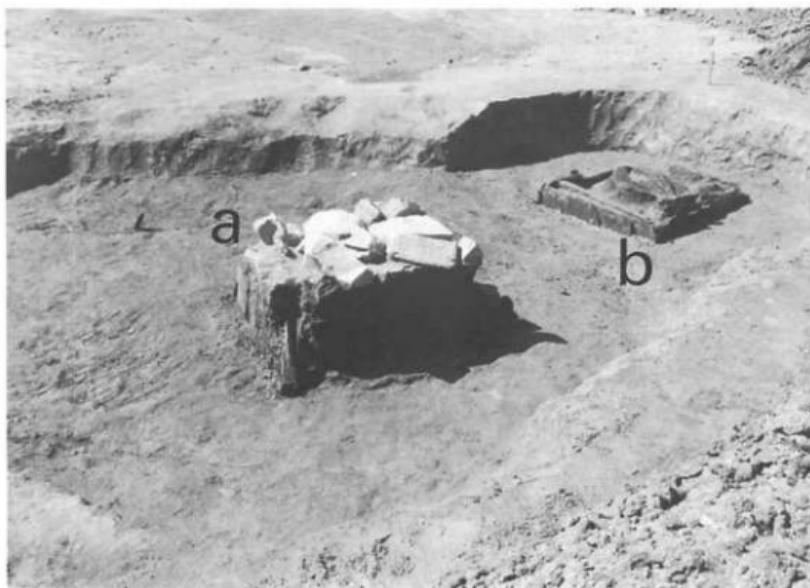
b. 同上内部の状態



a. B 1 区 第1号井戸全景



b. C 1-f区 ピット全景



a. C1区 第8号(a)・第9号井戸(b)全景



b. C1区 第8号井戸内部の状態



a. C1区 第9号井戸全景



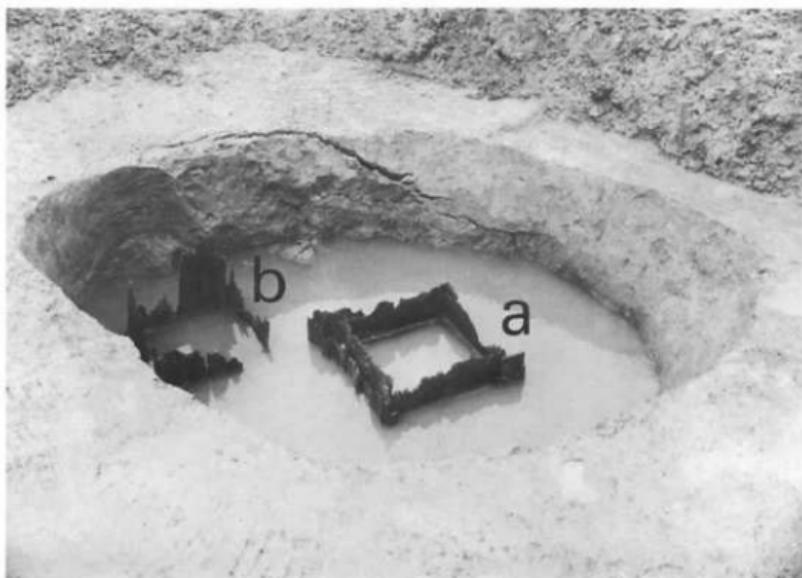
b. C2区 第4号井戸全景



a. C2区 第1号井戸全景



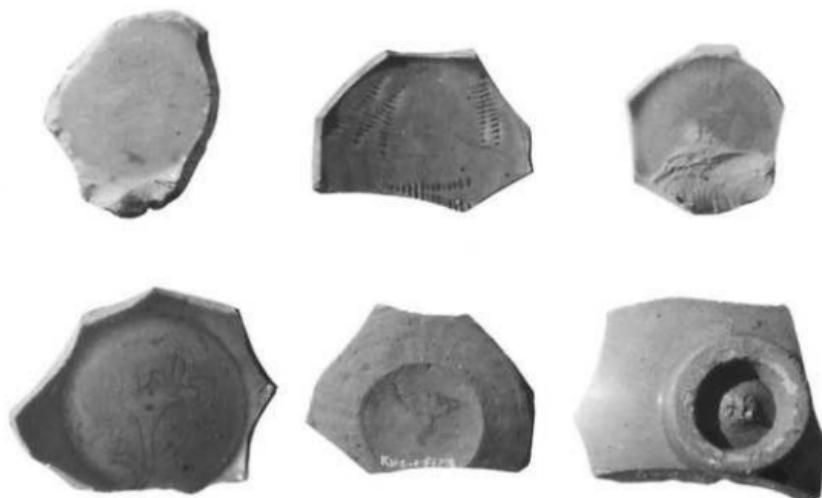
b. 同上井戸内部



a. C2区 第2号(a)・第3号井戸(b)全景



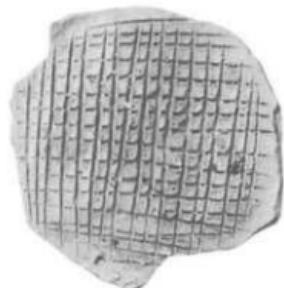
b. C2区 第3号井戸



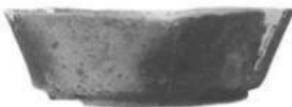
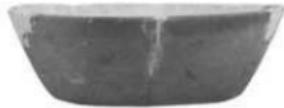
a. 中国系青磁器類



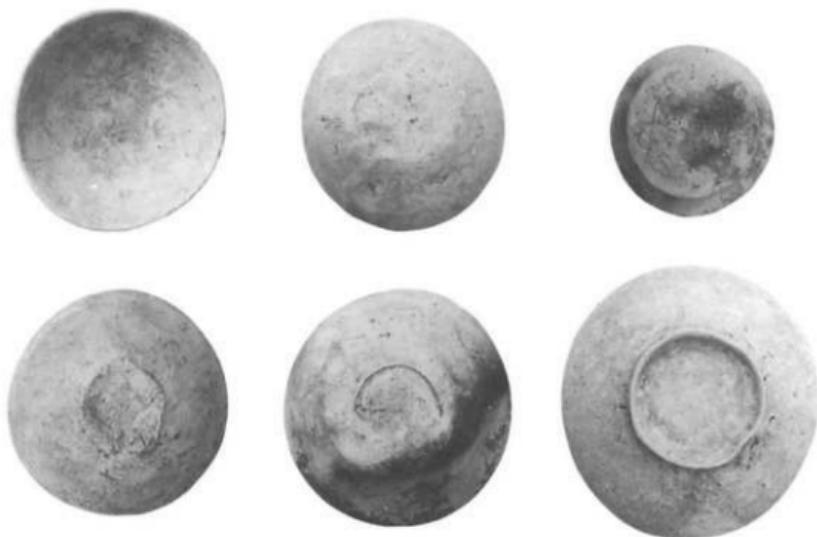
b. 留 前 烧



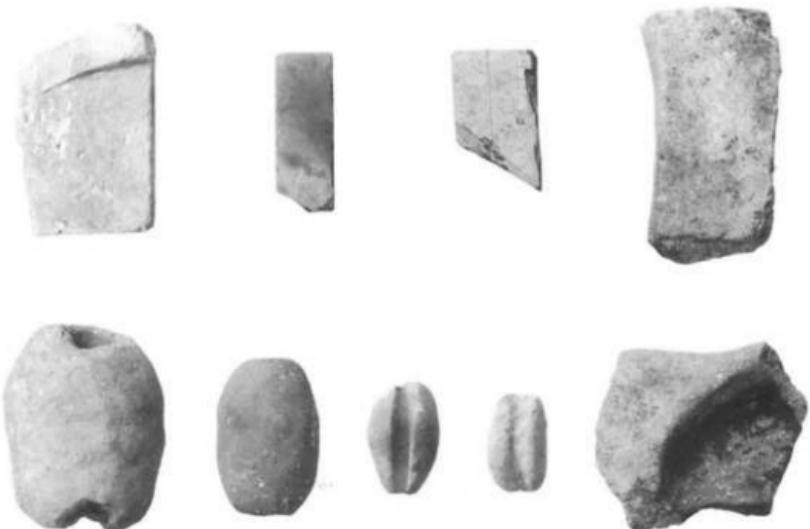
a. 常滑焼・瀬戸焼



b. 須恵器・瓦質土器



a. 土師質土器



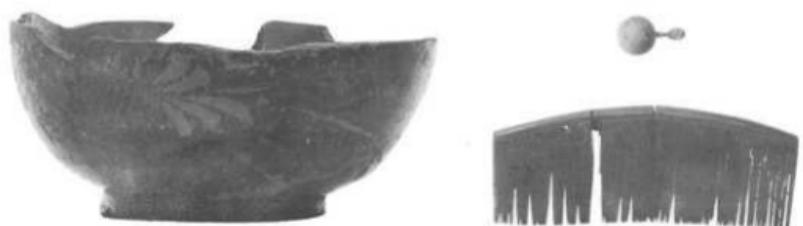
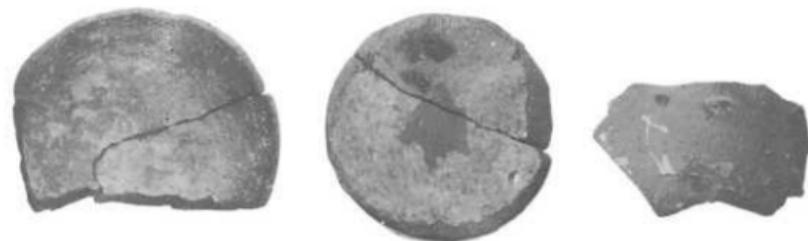
b. 石製品・土製品



a. 木 製 品



b. 下 駄



a. 漆器・かんざし・櫛



b. 鉄製品・銅製品

昭和47年3月25日 印刷
昭和47年3月31日 発行

草戸千軒町遺跡・1971年度

発掘調査概報

発行 広島県教育委員会
印刷 株式会社 柳盛社印刷所